

389
73



始



389
73

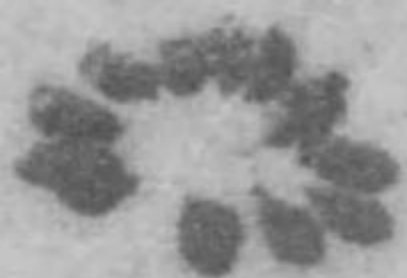
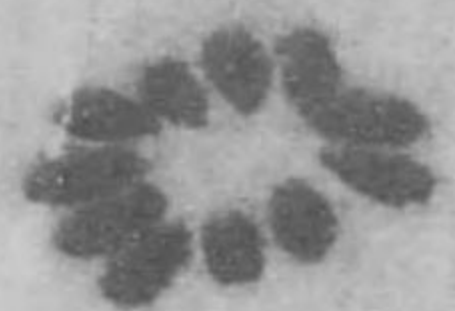
月

光

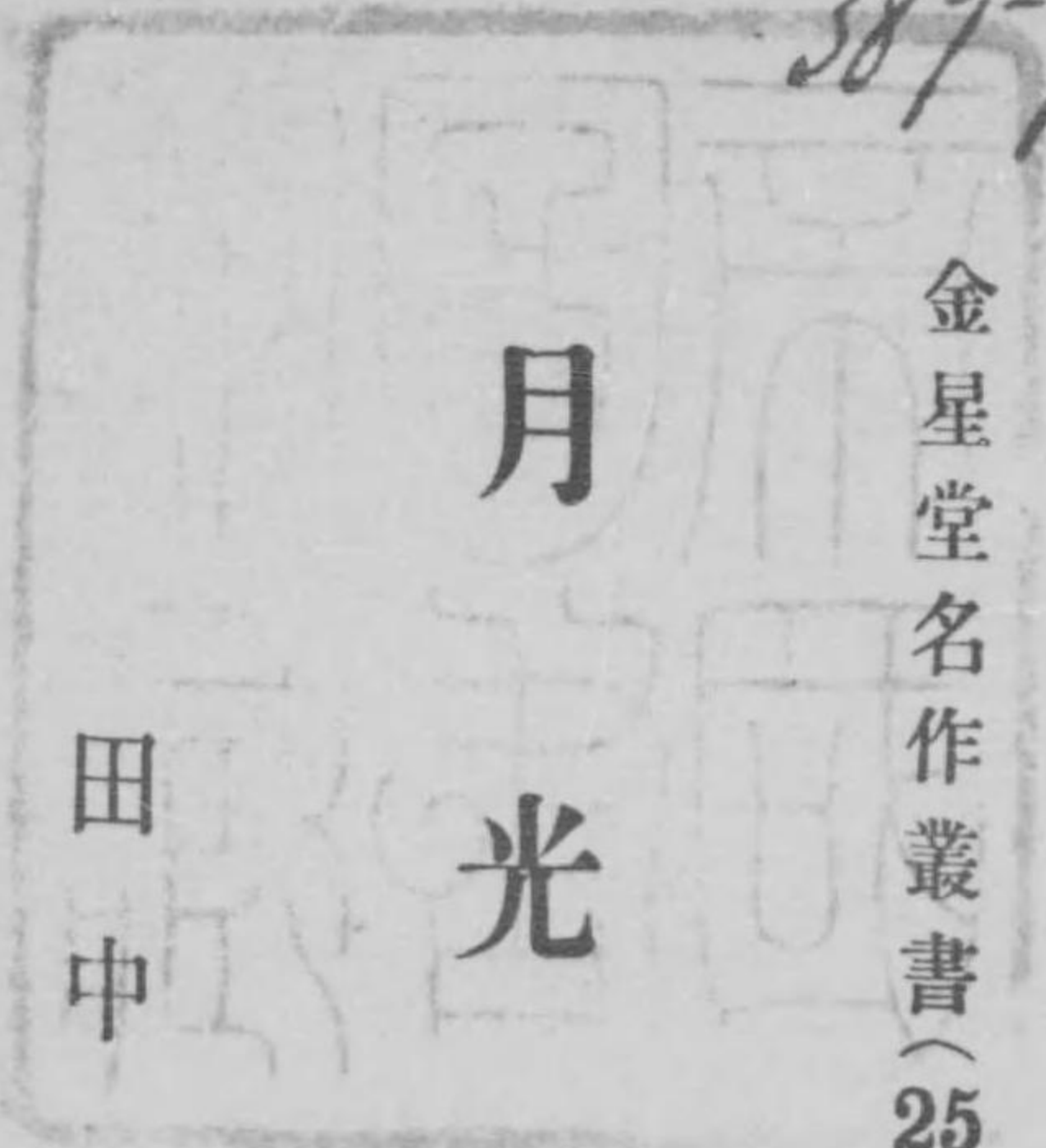
曲

田中

純著



389-73



金星堂名作叢書(25)

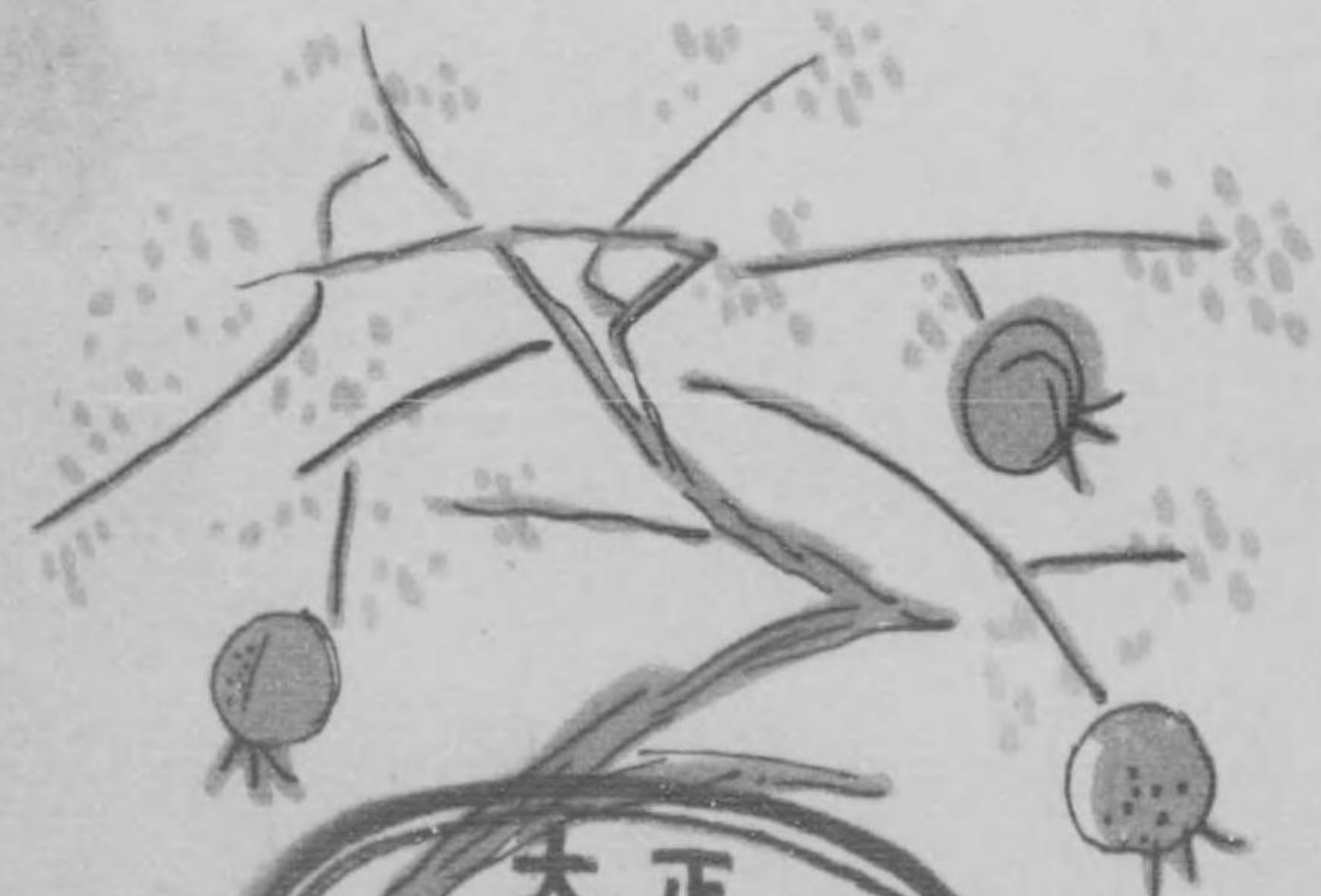
月

光

田中

曲

純著



大正
11. 9. 22
版 際 交 星



月

光

曲

田

中

純

著

月
光
曲

一
兄がいよいよ危篤だとの電報を受け取つて、敏雄が、間近に迫つた試験も何も打棄る氣で、翌朝の急行で、九州から歸つて來た時には、もう東京の姉や、嫂の母親たちも集まつてゐた。

「おや、お歸んなさい」

吾家ながら、何となく憚られるやうな氣持で、もう薄暮に迫つた立關に足を踏み入れると、何かの用事で立關先を通りかゝつたらしい姉が目ざとく見つけては聲をかけた。

「……………」

敏雄は、たゞ譯もなくにつと笑ひかけて、廣い式臺に足をかけたが、その時、ふつと、淡い線香の香りが、暗い奥からほのかにたゞよつて來るのを感じた。

「たうとう駄目？」

「え」

姉はかすかに肯いた。

「何時？」

「昨夜の十時過ぎ。……でも、まあ、そんなところに立つてゐないで、奥にゐらつしやい」

氣がつくと、彼はまだ乗り捨てた俵もそのままにして、ほんやり式臺の上に立つてゐるのだつた。

「あゝ、俵屋さん、幾らだい」

まだ寒い春さきではあるが、三里近い山道を驅け通して、いきれが立つほどな汗を拭つてゐる俵夫に言ふと、

「そんなことは好いから、早くお居間にゐらつしやい」と、また姉に促された。玄關のそばの、がらんとした控へ間を通つて、平常うちで母たちの居間にしてゐる臺所わきの部屋に行くと、其處にはもう暗い電燈が點つて、その下に、母や若い叔父や、嫂の母親などが、小さい火鉢をかこんで、しめやかに居づくまつてゐた。

「やあ、歸つたか」
敏雄とは十歳も違はない若い叔父の聲は、それでも、元氣だつた。
「たゞ今」

敏雄は、誰にともなく、鬨ぎわで丁寧にお叩頭をした。何となく、變に改まつた氣持だつた。

「よく早く歸れましたね」

母親が、何時もの落ち着いたむしろ冷やかな聲で言つた。

「え、試験がもう迫つてゐるんですけども、兎に角、一度歸つて來やうと思つて……」
火鉢にかぶさるやうにして、小さく坐りこんでゐたもう六十近い嫂の母親が、目をしよほく／＼させて、一寸敏雄の顔を見た、が何とも言はなかつた。一瞬間、寂しい沈黙が、一座の上に落ちた。

「兄さんも、たうとう駄目だつたよ」

やがて叔父が、壓へつけたやうな聲で言つた。

「さうださうですね。今、姉さんから聞きました」

「あ、さうか、もう聞いたのか」

敏雄はそこで、何か言はなければならぬと思つたが、何も言へなかつた。豫期

されてゐた兄の死——むしろ、一族から望まれてゐた兄の死に對して、今更らしく悼むことは、彼には出来ないのだつた。

二

間もなくそこへ、氣忙しさうな姉が入つて來た。

「何うしたのよ、敏さん、そんなところへ坐つて、少し火鉢にでもあつたら好いぢやないの」

「あゝ」

さう言つて敏雄は、少しばかり前の方へにじり寄つたが、火鉢に手を出さうとはしなかつた。

「御飯はまだでせう？」

「あゝ、先刻汽車で辨當を食つたんだけど、何かあつたら食べても好い」

「ぢやあ待つてゐらつしやい。私もあとと一緒に食べるから」

「しかし、その前に一寸兄さんを拜んで來やうかな」

「さうね。それも後にしたら何う。今は、山岡さんなんかも來てゐらつしやるから」

姉はさう言つて、また急がしさうに立つて行つた。臺所の土間を隔てた向ふの部屋には、近所の小作人や女たちが、泣き喚く子供まで抱へこんで、澤山集まつてゐた。

「姉さんは何時歸つて來たんです？」

敏雄はすぐ母に訊いた。

「雪子さんが歸つてゐらしつてから、もう五日くらゐになりますかね」

母は母の弟に當る叔父を顧みて言つた。

「さうだ、恰度今日で五日だ」

「兄さんの容體がだん／＼悪くなるやうですし」と若い母は辯解するやうに言つた。「それに達坊が少し風邪氣のやうだし、お客様は多いし、私たちでは何うにも手が廻らないものですから、急にお父様から電報を打つていたゞいて、雪子さんに歸つていたゞいたのですよ」

「僕にだつて、もつと早く電報を打つて下されば、すぐ歸つて來たのでしたのに」
「さうも思つたのですがね。まあ試験前だから、いざと云ふ時に電報を打てば好いつて、お父さまがおつしやるものですから、たうとうそのまゝになつてしまつたのですよ」

母のその落ち着き拂つた言葉を聞くと、敏雄はます／＼いら／＼した。嫂もそば

にゐるのに、何かと云ふと姉ばかりをたよりにしてゐるやうな、この若い繼母の鈍さやぐうたらが、敏雄には腹立たしかつた。姉のすぐれた世才を信じ切つて、彼女に一目も二目も置いてゐるのを見るのが、愉快でなくもなかつたが……

「それで、お葬式は何時になつてるの？」
敏雄は今度は叔父に訊いた。

「明日の午後二時出棺と云ふことになつとるんだが、まだ葉書の刷りものも出來て來ないし、それに、鶴崎さんがそれまでに間に合ふか何うかも解らないのでね、一寸弱つとるんだ」

「鶴崎代議士がわざわざ遣つて來るの？」

「うむ。今日の電報では是非來ると言つて來とるんだがね。間に合へば好いがと思つて。……政黨關係の名士にはみんな來て貰はうと云ふんでね、今朝から随分骨

を折つたよ」

それを聞くと、敏雄は思はず眼を伏せた。あゝした兄の不名誉な最期から、世の中にすつかりひげめを感じるやうになつた父が、せめてはかうした機会に、一つには死者のために、一つには自分のために、普通りの羽振りを示さうとする心持が解らないではなかつたが、かうにもなつた一家かと思ふと、敏雄の心は暗かつた。

三

が、かうしてゐながらも、敏雄には、嫂の姿の見えないことが、何となく気がかりになつてゐた。

多分、父と一緒に佛間にゐるのだらう——さう思つてゐた。が、何時まで経つても姿を見せないのを見ると、敏雄は、不安ではないまでも、或る不平を抱かすに

られなかつた。自分が歸つて来たことは、姉によつて父や嫂たちに知らされたに違ひない。さうすれば、誰が來てるようとも、一寸でも、嫂が出て來る筈であるのに……

敏雄は、何かに裏切られた不快さで、いらく／＼してゐた。

實際、九州からの長い汽車旅の中で、敏雄は幾度、悲しみに泣き頼れた嫂の姿を思ひ描いたか知れなかつた。

——自分が歸つて來たと聞いて、先づ飛び出して來た嫂があゝの華奢な白い手を兩肩にかけて、よゝと泣き頼れる。自分も彼女の肩に手を置いて、同じやうに泣く。と、彼女は更に新しい悲しみに、身も世もなく泣き頼れる。……

さうした場面が、さまざまの色彩を帯びて、眠りにくい汽車の中で、幾度となく彼の頭を掠めた。

と、彼はまた、この一箇月ほどの間に嫂と遣り取りした二三本の手紙のことを思ひ出した。最初に手紙を送つたのは彼であつた。嫂から、すぐ返事が来た。彼はまた重ねて手紙を書いた。二週間ばかりして返書が来た。また折返して手紙を書くと嫂からもすぐ酬いられた。無論、彼の手紙に書かれた文字も心持も、たゞ「感謝」以上のものでは決してなかつたが、それでも嫂から返事を受取るまでは、何となく落ち着けない自分の心を、何うすることも出来なかつた。

「ほんとに嫂さんは氣の毒だ」

下宿屋の二階で、ほんやり夕雲を眺めて居る時などに、彼はよくさう呟いたが、さうした呟きの中に、何かしら或る甘美なものがあることは、彼自身も氣附いてゐた。言つて見れば、それは、空想勝ちな若者の一種の *allantry* に過ぎないものであつた。

た。青い鳥を失つて泣き悲しむ小女王のために、その鳥の行方を探ねて野山を經過する小騎士の心と、餘り遠くは隔たつてゐなかつた。實際彼は、自分の同情に信頼し切つてゐた。そして、かうした空想や期待から来る甘美は、さうした有徳な同情に對する何かの報酬だと思つてゐた。

しかし、その甘美に酔つてゐる彼には、かうした *allantry* や同情や慰藉の中に、どれほどの嘘と、どれほどの好色と、どれほどの自己主義とがひそんでゐるかを知らなかつた。

現に彼は汽車の中で、嫂を更に悲しませるために、兄が生きてゐて呉れるよりも、むしろ死んでゐて呉れることを、待ち設けてゐたのではなかつたか！

「若旦那様、御飯の御支度が出来ましてございます」

見知らない女中が来て、ほんやりしてゐる敏雄を促した。

四

奥の間に行くと、準備の出来た食卓の前に、姉が一人待つてゐた。そこは先日までも兄の病室に當がはれてゐたのだが、今は綺麗に片づけられてゐた。薬の香りとも汗の香りともつかない仄かな名残りが残つてゐるのも何となく佗しかった。

「やつぱり此處で？」

敏雄は、今更らしく部屋ちゆうを見廻して訊いた。

「えい。ほんとに靜かに。まるで眠るやうに……」

「別に深い心の苦しみなんで云ふものもなさうでしたか」

「さうね、そんなものもなさうだつたわね。其前は何うだつたか知らないけれども、私が歸つて來た時には、もうまるで子供のやうになつて、美津子さんにお琴

を弾いて呉れなんて。……美津子さんも、これまでにないことだと言つて不思議がるくらゐだつたのよ」

「やつぱり、死ぬ前になると、心がやさしくなるんですね」

「兄さんも、今度歸つて來てからは、よつほど違つてゐたやうだつたわね」

ふつと、二人は黙りこんだ。兄の入牢に引きつゝいた父親の失脚、兄の病氣、假出獄——その暗い三年間の出來事が、もう遠い昔のことのやうに思ひ出された。

「お茶漬にしよう」

可なりお腹が空いてゐるのに何も喉を通らなかつた。味のない硬いものが、口中で踊つてゐるやうな氣持だつた。

「何うしたの？ まだこれで二杯よ」

「何だか、ちつとも食べたくないから」

「駄目よ。今夜はお通夜だからしつかり食べて置かなきゃあ」
さう言ひながら、姉もまだ、最初の一杯に殆んど箸をつけてゐなかつた。悲しみに慣れた姉ではあるが、流石に、また新しい涙に襲はれたらしかつた。

「美津子姉さんに會つた？」
しばらくして姉が訊いた。

「いいえ、未だ。何處にゐるの？」

「お書齋に休ませてあるんですけどね」姉も、食べ残しの御飯に茶を注ぎながら言つた。「今日は随分騒ぎだつたのよ」

「嫂さんが？」

「えい。お午ごろからね、髪を切るつて騒ぎ出してね、随分困つたわ」
「そして、切つちやつたの？」

敏雄は、多少急き込んで訊いた。

「私が漸く宥めて、先刻、無理矢理に寝かしつけたんですけれどね」
「さうかなあ……」

敏雄は、何故ともなく、唸くやうに言つた。

「美津子さんもまだ若いのだし……」と、姉は言ひかけて、また別のことを言つた。

「やつぱり兄さんのことが氣の毒でたまらなくなつてゐるらしいのね」

「ぢやあ、僕、まだ會はないでゐる方が好いかも知れませんか」

「さうねえ、敏さんに會へばまた悲しくなるだらうし……。敏さんは涙もろいからねえ」

姉はさう言つて、敏雄の顔を見た。

五

食事が済んでしばらくして、佛間に行くと父が、郡會議長の岡山などと一緒に、しよんほりと兄の枕元に坐つてゐた。平常佛いぢりなど殆んどしない父なのに、何時の間にか、すばらしく立派な佛壇が、北向きの兄の頭のところにしつらはれて、燈明があか／＼ともつてゐた。

「うむ、歸つたか」

敏雄の姿を見ると、香煙の立ちこめた中から、父が言つた。

「たゞ今」

敏雄は、父にともなく、客にともなく、兄にともなく、低く頭を垂れたが、それ以上何も言へなかつた。

「思つたより早く歸れたな。明日の葬式の間合へば好いがと思つて、心配しとつたよ」

「いえ、もつと早く歸らうと思へば歸れたんですけども……」

「まあ好いさ、何うせみんな、覺悟はしとつたのぢやから……しかし、學校の方は何うだ。試験前ぢやあないかの？」

「え、試験前は試験前なんですけども……」

「何時からだ？」

「もう四五日うちです」

「そりやあ困るぢやないか」

「え」と言つたが、父のそのなじるやうな口吻が、敏雄には何故ともなく不服だつた。この一族の不幸のどん底に於て、試験なんか何だと云ふやうな、多少捨

てばちな、感傷的な氣持が、彼を強く動かしてゐた。

「そりやあ、早く歸ることにせんといかんな」

「えい。しかし、構はないのです、これから試験までに歸つたところで、もう準備なんかも出來てゐませんし、うまくパスするか何うかも解らないのですから」

「そりや不可ん。試験だけは、何うしても受けなきや不可ん。そんな暢氣なことぢやあ困るぢやないか」

さう言つて父親は、場所柄をも忘れたやうに、子供たちに對する愚痴めいたものを、客たちに話し始めた。實際、父親は、あの事件以來、恐ろしく愚痴つほく、氣弱になつてゐた。それは、美しい髻などを蓄へこんで若い藝者などを連れ廻した若若しさが、急に爺むさく、引込み勝ちになつたこと、共に、子供たちを驚かせた變化だつた。

「敏さん、佛を一べん拜んで上げたら何うです」

父の言葉が一寸切れるのを待つてゐたやうに、客の一人が言つた。敏雄も、先刻からそれに氣着いてゐながら、父のために一寸手が出せないのだつた。

「はあ」

さう言つて、敏雄は、兄の方へにじり寄つた。

黄八丈の軽い夜具の下に、兄はながくと眠つてゐた。膝こぶしのところと、足の尖のところとが、ゆるやかに傾斜を作つて、軽く盛上つてゐる形には、何處にも死の姿が見えなかつたが、顔にかけた白い手巾をめくり上げると、其處には全くの死像があつた。人々を、あれほどに愛させもし、恐れさせもしたあの鋭く輝いた目が、今は光りもなく、鈍く、半眼に閉ぢられてゐた。

六

敏雄はしばらく、ぢつと兄の顔に見入つてゐた。彼等をあれほどまでに恐ろしからせたあの特別に高い鉤鼻が、今は、鼻の模型か何かのやうに、蠟色に白く澄んでゐた。意外にも怖いほどな平和や静かさが、その顔にあつた。

「好い往生だらう」

敏雄が手巾を顔にかけると、父が、待つてゐたやうに言つた。

「ほんとに好い往生ですね」

「まるで眠るやうだつたからな」

ふと見ると、敏雄の膝のところの、兄の枕元に、小さい革表紙の聖書が置いてあつた。それは曾て敏雄自身が、町の書物屋から買つて来て、冷かし半分に讀んだこ

とのあるものだつた。

「これは何うしたんです」

「うむ、死ぬる少し前から、ひどくそいつに凝り始めてな、まあ、魔除けのつもりで置いておいたのさ」

「耶蘇の先生でも來たのですか」

「いや、そんなこともなかつたが、何うしたはづみか、ついそんなものを讀み始めてな、死ぬる時には、耶蘇が言ふやうなことを言つてゐたよ」

「さうですかねえ」と言つたが敏雄の目には、自然に、涙がにじんで來た。あの剛愎で、人を人とも思はないやうな、悪魔のやうに強かつた兄にも、たうとう懺悔や、祈りや、涙が來たのだと思ふと、彼の心も何かしら甘い涙にしたるのだつた。

「まあ、何の宗教でも好い。好い往生が遂げられりやあ結構だよ」

父が、集まつた村の人たちに多少辯解でもするやうに言ふと、

「そりやそうですとも。どんな宗教にしたところで、悪いことをせいと云ふ宗教はありませんし、善いことをさせて、それで死ぬる時には安心させて呉れるんですから、そりやあ結構なものに違ひありませんよ」と、若い郡長も合槌を打つた。

それからしばらく、みんなの間に、宗教談みたいなのが續いた。誰が言ふところも、宗教が悪いものでないと云ふことでは一致した。しかし、宗教が誰にも必要だと言ひ切るものは一人もなかつた。ひとり、天理教にひどく凝つてゐる或る小作農上りの地主だけが、信仰が誰にも必要だと云ふことを説かうとしたが、彼の貧しい言葉では、人々を説得するわけには行かなかつた。

敏雄は、その議論を聞きながら、隅の方に小さくなつてゐた彼の意見も、大體に於て、彼等と同じだつた。たゞ、兄一人に取つて、特別に意義のある兄の行爲が、

かうして愚かしく一般的の事柄として論じられてゐることには、多少の不滿を感じないではなかつた。

しばらくして、村の僧侶が、叔父に案内されて入つて來た。それに引きついで、臺所で、振舞酒にあづかつてゐたらしい小作や村の人たちが、どや／＼と集つて來た。殊勝らしく珠數などを持つた老婆たちも、四五人まじつてゐた。

やがて、顔の青ざめた小柄な嫂が姉に擁されて入つて來た。と、肥料と酒と線香との香りの立ちこめた中で僧侶の讀經が始まつた。

七

僧侶の讀經が濟むと、集まつてゐた老婆や老爺たちの和唱が始まつた。

「なむまいだぶ、なむまいだぶ……」

單調な鉦や木魚の音の續く限り、老人たちの歟枯れた聲が、低い木枯のうめきのやうに、斷續して續いた。それは、悲しみには無關心で、しかも悲しみにある人々の心を引き緊めるやうな聲だった。

姉や嫂たちが、入れかはり立ちかはつて、酒を運んだ。人々は、遠慮深さうに杯を取つた。さうして、この死骸を取りかこんだ亂雑な酒宴の中に、良い通夜の夜が更け始めた。

しばらくして、敏雄はそつと縁がはに出た。線香と、酒と、屍臭と、人いきれとにむつとするやうな部屋の外に、惱ましい早春の夜が迫つて居た。

星もない、暗い宵だった。刺すやうな寒さだったが、それでも何處かに、時候のゆるみを感じられた。秋の宵のやうな時雨が、さつき、足輕に過ぎて行つたばかりの庭のおもてに、しつとりと春が降りてゐた。敏雄はこんもりと繁つた庭の植ごみ

に見入りながら、何故ともなく深い溜息をついた。

「お歸りなさい」

その時、嫂の聲が聞えた。嫂の小柄な白い顔が、彼のすぐそばの闇の中に浮いてゐた。敏雄はたゞに、つと笑つただけで何とも言はなかつた。

「何時歸つて？」

「先刻、夕方」

「さう。誰も知らして呉れないのね」

「恰度、嫂さんが休んでゐらしたものだから……」

「でも、よく早く歸つて來られたわね、疲れたでせう？」

「嫂さんこそ……大變だったでせう？」

敏雄はこゝで、嫂に對する烈しい同情を言ひ現はさうと思つたが、口に出せば平

凡な言葉になりさうなので、黙つてゐた。

「離れで少し休んだら何う？」

「ええ」

「私も少し休むわ」

「ぢやあ行きませうか」

離れは、廣い植こみの庭を越えて、裏庭の方に廻つたところにあつた。まだ祖母の生きてゐた時分に、祖母の隠居所に建てられたものだが、祖母が死んでからはつぎつぎに中學や女學校に上るやうになつた兄や姉や敏雄のための、都合の好い勉強室にされたのだつた。

「危なうござんすよ」

母屋からの光りのとゞかなくなつた木立の中に入ると、敏雄はさう言つて、袂か

らマッチを取り出した。浅い水溜りに嫂がびしやりとはまりこんだからだつた。

敏雄の掌の中を赤く染め出したマッチの光りは、ところ／＼に斑點のやうに残された小さい雨の痕を青く照し出して、すぐに夢のやうに消えた。

「有難う」

さう言つて美津子は、からだを敏雄にすり寄せるやうにして木立の中を抜けた。

八

「あゝ怖かつた」

木立を通りぬけると、美津子は呟くやうに言つた。しかし、何が怖かつたのか、それは敏雄には勿論、美津子自身にも解らなかつた。たゞ、寒けとも怖れともつかない或る軽い戦慄が、彼女の全身を走つた氣がしたのだつた。

「何うしたのです」

「いえ、たゞちよつと……」

美津子はさう言つて、闇の中に、敏雄の顔を覗くやうにした。

「どんな氣持がしますか？ 兄さんが亡くなつて」

敏雄が一寸立ちどまつて、多少改つたやうな口調で訊いた。

「どんなつて、それはもう前からその覺悟はしてましたけれどね、たゞ何だか氣の毒でたまらないの」

「それはさうですね。自分でしでかした事は事だが……」

「私はまた、それだけになほ氣の毒なの。あの氣の強かつた人が、すつかり小さくなつてゐるんですもの。初めて、うちに歸つて來なすつた時なんか、お父さんの御部屋に、挨拶をしによう行きなさんのですものね」

「その時父は何うしました？」

「たうとうお父さまの方から出てゐらしてね……。二人は黙つて泣きなすつたわ」
美津子はもう、手で目を壓へてゐた。

「さうですかね。あゝなると、人間はやつぱり柔しくなるんですね」

「そりやさうよ。あのお兄さんが、あなたの成績のよかつたことを聞いて、ほんとに心から嬉しさうな顔をなすつたのですものね」

「兄貴がね……」

「それに、死ぬる少し前から、毎日聖書ばかり讀んでゐなさるの」

「それで、死ぬる時には、何か信仰みたいなものでも持つてゐましたか」

「さあ。それはよく解りませんがね。でも、世の中にはえらい本があるもんだなんてよく言つてゐらしたし、すつかり安心して死になすつたのだから、まあそれ

でよかつたのだわね」

「さうかなあ。兄貴でもさうなるかなあ」

「ほんとに、あれだけ不幸が続いてはね」

二人は何時か、菜園のそばに立つてゐた。すぐそばの離れには、何時になく明るい灯が入つて、無気味なほど大きい頭が一つ、明るい障子に影を落してゐた。

「叔父さんたちがゐるんですね」

「さうらしいわね」

「入りませうか。寒くなつたでせう」

「ええ、でも。もつと二人きりで話してゐたいわね」

二人は、またしばらく黙つて立つてゐなければならなかつた。しかし、さうした

沈黙が、何よりもよく二人の心持を語つて呉れた。何故ならば、彼等の今の願ひはたゞ彼等自身の若い感傷に浸つてゐることであつたから。而も、かうした感傷に浸ることによつてのみ、彼等は自分たちの不幸から逃れることが出来、自分たちの不幸を楽しむことが出来るのであつた。

しかし、さうした一つの感傷が、彼等の沈黙のうちに、他の一つの感傷を生みつつあることを、彼等自身は知らなかつた。

九

美津子は今年二十九歳だつた。十八の春、女學校を終ると同時に健造に嫁いでから、彼女は三人の子供を生んだが、どの子供も育たなかつた。最初の子供が漸く一週間を生きただけには、どれも死産であつたり、流産であつたりした。人々はそれ

を、健造の度外れた放蕩から来る悪疾の結果だとした。それは、健造自身も認めだし、彼等の親たちも認めてゐた。が、さうした夫の放埒に對してもそれから引き起されるいろ／＼な不幸に對しても、彼女はむしろ冷酷なほど靜かだつた。

夫が家を明け初めたのは、結婚後まだ一週間も経たない頃だつた。が、さうした場合にも、彼女は帶もとかないで、夜が明けるまで待つてゐた。健造が二三日も家を明ける場合には、彼女も流石に疲れて、しばらくうと／＼するやうなことがあつたが、それもたゞ晝間の二三時間に過ぎなかつた。さうした場合、夫は大抵、家の中のごたごたし始める夕景を覗つて歸つて來たが、彼女は特別に嬉しさうな顔もしない代りには、特別に不機嫌な顔もしないで、酒疲れでへと／＼になつた夫を迎へた。

特別に喜びもしない代りには特別に悲しみもしないことは、彼女の度々の妊娠と、それに引き續いた子供の死に際しても同じことだつた。彼女は義務のやうに妊娠し

て、義務のやうにその小さい柩を見送つた。

人々は、彼女の貞淑を稱した。實際、形の上では、彼女はたしかに、温順貞淑など云はれるべき妻の一人だつた。たゞ、曾て美津子を教へたことのある義妹の雪子だけはさうばかりは思つてゐなかつた。何か知ら、えたいの知れない不氣味なものが彼女の中にあるやうに思へた。それは、計り知られないほど深い彼女の冷たさから来るやうにも思へたし、何か想像もつかないやうなものを待望んでゐるものゝ様にも思へたし、彼女の靈魂の特別な鈍さから来るものゝやうにも思へた。兎に角、雪子が、彼女に對して、或る怖れに似たものを感じてゐたことは事實だつた。それに、美津子の女としての賦性や、母性に對しても、或る疑ひを持つてゐた。兄のあの放埒なども主として美津子のさうした缺陷から来るやうにさへ考へられるのだつた。雪子は、彼女のことを考へながら、よく美津子の女學生時代を思ひ出した。その

當時、まだ赴任したばかりの彼女は、上級の生徒たちとは幾らも年が違はないので、自然、彼等とも親しんでゐたが、美津子とだけは、何うしても親めなかつた。特別に不愛想でもなく、無論、憎たらしくはなかつたが、しかし愛嬌の好い娘だとは言へなかつた彼女は、彼女のからだのやうに小さく、堅く、澄み切つてゐた。それが、誰にも、彼女の親たちにまで、近づき難い感じを與へた。

實際、彼女の父たちも——それはこの地方の相當に名の知れた士族で、少しばかりの家作などを持つてゐたが——彼女を變人だと言つてゐた。

が、さうした彼女にも、たゞ一度、親たちを驚かせるやうなことが起つたことがあつた。

それは、美津子がまだ十ばかりの頃だつたが、彼女には珍らしく、一人の友だちが出来たことがあつた。それは、町の人たちが通常「和二郎とこ、和二郎とこ」と呼んでゐる貧しい自作農の、同じ年ごろの娘だつた。和二郎とこは、三代前に、山陰道の方からこの土地に移住して來た穢多だと言はれてゐたが、實際、その妙に額の迫つたところや、鈍い小さい眼や、下唇の厚く飛び出してゐるところには、何となく下等な血族を聯想させるやうな、厭なところがあつた。自然、その一家は、町のどんな交際にも加はらないで、自分たち一家で作るものを、自分たち一家で食べると云ふやうな生活をしてゐたが、美津子は何時の間にか、この娘と遊ぶやうになつてゐた。

何して其娘と夫程親しくする様になつたかに就ては、其後、可なり大きくなつて、美津子自身で考へたことがあつたが、それはよく解らなかつた。家が近かつたこと、

どちらとも、友だちと云ふものが殆んどなかつたこと——そんなことも考へられたが、兎に角、彼女と遊んだ三月ばかりの記憶が、それから遙か後の結婚時代でさへも、少女時代のたゞ一つの楽しい回想として彼女の頭に喚びかへされた。

……それはたしか、雨の多い梅雨の頃である。彼女とこの娘とが、じめくした秣の中に、寝ころがつてゐたことがある。外には雨がわびしげに降つてゐた。彼女はよく、その時の異様な枯れ草の香りを思ひ起した。

……これもその頃のことだ。雨の霽れ間に、その娘の兄——それはまだ十三四歳の少年であつたが——を手傳つて、秣倉の軒下に、小さい小屋を作り始めたことがあつた。何のためにそんなものを作り始めたのか、それは今でも思ひつけなかつたが、小さい棒杭を打ちこんだり、その上に古席や毀れブリキで屋根を葺いたりするところが、どれほどあはたしい喜びであつたか知れない。やがて、雨がふつて來た。

三人はその小屋にこもつて、しばらく屋根を見上げてゐたが、雨は容易に漏れなかつた。

「うまいぞ！」

少年が言ふ。と二人の娘も、むしろ嬉しくなつて、やたらに手をたたくのだつた。自分たちが葺いた屋根を傳つて、大きい雨垂れが、ほたくと地の上に落ちる——その樂さを、其後も、彼女は幾度思ひ起したか知れない。

が、其後間もなく、娘は急病で死んだ。美津子がそれを知つた時には、娘はもう町はづれの小さい墓地で、小さい自然石になつてゐた。それから十日ばかり、父親に知られて叱られるまでは、彼女は毎日、學校の歸りにその墓地に寄つて、日の暮るまで、その自然石のそばで、黙つて砂遊びをしてゐた。

父親は初め何も知らなかつた。彼女が和二郎とこへ行くことさへ知らなかつたが、

餘り毎日歸りがおそいところから、初めてそれを知ると、父親は烈しく彼女を叱つた。しかし叱りながらも、この冷たい、可愛げのない娘にもなほこれだけの厚い友情があるかと思つて、或る満足を感じた。

一一

女學校を卒業すると、彼女はすぐ健造の妻になつた。それは健造自身の希望からであつた。その頃健造は、文官試験に通つたばかりで、近日中に、東北の或る僻地の官吏として赴任することになつて、しばらく故郷に歸つてゐた。無論、彼のためのいろ／＼な縁談が親たちから持ち出されたが、雪子の部屋で、今年の卒業生のアルバムの中から、一際目立つて美しく撮れてゐる美津子の寫眞を見つけると彼は一も二もなく、彼女をと希望した。それに對して、雪子は多少首を傾けないではなかつた。

つた。あの冷靜に澄しこんでゐる、可愛げのないおほこ娘に、何うしてこの道樂者の兄の機嫌が取れるだらうと思つた。しかし健造に取つては、彼女のその大理石のやうな冷たさや、純潔や、つましさにこそ、望みがかゝつてゐるのである。

「もう道樂もし盡した」——と彼はその時思つてゐた。

事實、十六歳を振出しに、彼の放埒な生活も随分長かつた。生れつき頭がよくつて、相當な才氣を持つてゐる上に、放膽と細心とを兼ねたやうな、妙に融通の利く頭を持つてゐる彼は、その爲に學校をしくじるやうなことはなかつたが、中學から高等學校大學を通じての彼の生活は、留め度のない飲酒と漁色と悪疾との繰り返しだつた。

大學にゐる時分、正月の松の内を、吉原の小格子で、すつかりだらしなく飲み過ぎた時だつた。まつ晝間、肩にとも切れのかゝつた粗末な~~どてら~~を着こんで、往來

のまん中で、女郎を相手に羽根をついてゐたのを、何時の間にか友だちに見つけられてゐた。もう酒にも飲み飽きてふやけ切つた氣持を無理にも引き締めやうと思つて、漸く月のなかば過ぎになつて學校に行つて見ると、その噂がもうクラスぢゆうの好い笑ひ話しになつてゐた。それ以來彼は、「吉原君」と云ふ異名を受けるやうになつたが、しまひには、矢島と云ふ本姓よりも吉原と云ふ異名の方が、通りが好いくらゐるになつてゐた。

而も、さうした放蕩の揚句に夏になると、彼は何時も、さまざまな悪疾を背負つて故郷に歸つて行つた。實際、暑中休暇の三箇月は、彼に取つては、それらの悪疾の療養期間に過ぎなかつた。彼は、若い頃からの遊び癖が同じやうに變らない父親と一緒に、同じ患者として、毎日、村醫の門をくゞつた。しかし、さうした生活にも、もう見切り時が來た。——と彼自身は思つた。事實

彼は少し疲れてゐた。その上にいよくこれから官途について、實際の世間に乗りに出すのだとなると、彼にも自ら、或る改つた意氣ごみが生じて來る譯だつた。そこで彼は、これまでの正反對な方向に進むことによつて、その改つた意氣ごみを満足させやうとした。

美津子の冷厳な姿が彼の心を引いたのはそのためだつた。

それは、遊びに疲れたすべての男が、時々、氣まぐれに、しかし嘘ではなく、心の底に抱く心願の一つだつた。

かうして、健造の異常な熱心で、この結婚は、すばやく取り結ばれてしまつた。が、かうして取り結ばれた結婚は、健造が豫期したほどには幸福なものではなかつた。

一一一

結婚の當夜や、それから醒めた翌朝は、彼の心も限りなくすがくしかつた。しかし、それから四日目の朝、或る海近い温泉宿の二階で目が醒めた時の發鬱を、誰が豫期することが出来ただらう？ 彼は久しぶりに、あの三日四日の流連の後に來る遊女に對する堪らなく忌はしい腹立たしい感情を、自分の若い妻に對して感じた。部屋に籠つた二人の寢息さへ、彼を息づまらせるやうだつた。彼ははつとして自分の心に驚いたが、それを何うすることも出来なかつた。

恰度、二人が揃つて、美津子の家に里歸りに行つて、歸つて來た日の夕暮だつた。里の父と健造とで、晝まへから酒になつて、晝食とも晩食ともつかない晚い中食を食つて歸つて來た二人は、寢るにはまだ早い所在なさを、ほんやり庭の上を眺めて

過してゐるが、その時、二人の間にこんなことが話された。

「何う思つてるの？ 美津子さんは、僕と結婚したことを」

「何うつて、別に……」

「後悔してる？」

「いゝえ」

「何うして僕のところへなんか來る氣になつたの？」

「父が參れと申すんですもの」

「それだけ？」

「はい、別に……」

「これまで僕を見たことがある？」

「はい、一度、先生たちと御一緒に學校でテニスをなすつたことがございますで

せう。あの時に、矢島先生の御兄さまだつて承はりましたわ」

「さうかなあ、そんなことがあつたかなあ」

しばらく黙つてゐた。が、健造はまた、結婚の當夜にも寝物語に話したことを口に出した。

「しかし、お父さんもよく、僕のやうな道樂者のところへ美津子さんをよこしたものだなあ。……美津子さんは何にも知らなかつたのだらう？」

「いえ、私存じて居りましたわ」

「知つてて來たの？」

「でも、そんなこと、私には何のかゝはりもないのでございますもの」

その時健造は、何か冷りとしたものが、自分の胸に迫つた氣がした。

實際、彼は今、或る懺悔に似た心持を抱いてゐた。新しく若い妻の前で、自分の

悪行を悔いたり卑下したりすることによつて、せめても自分の有徳を感じて、この清淨な處女を樂みたかつたのである。而もさうして投げ出された彼の懺悔が、かうした冷たい磔となつて、彼女から投げ返されやうとは！ 彼は何となく底の知れない深淵から來る冷たい息吹に吹かれたやうに、ぶる／＼と、心の底に身ぶるひを感じたのだつた。

そしてその夜から、彼はまた深い酒に親しみ始めた。

一三

それから二週間ばかりして、彼等は北國の赴任地へと旅立つた。大阪、京都、名古屋、彼女が名のみで知つてゐるやうな大きな町々が薄暗くがらんとした停車場構内として彼女の坐つてゐる窓の前を過ぎた。

東京には三日ばかりゐた。健造が毎日、役所に顔を出したり先輩を訪ね廻つたりして居る間に、彼女は健造の叔母につれられて、窓飾のぎら／＼と輝くやうな町や、この世の贅澤物のすべてを取り集めたやうな、人々の吐息で息づまるやうな壯麗な家の中や、ひろ／＼とした池の見渡される、木深い山の中のやうに静かな公園や、そのほか、彼女の記憶にもとまらないやうなさまざま／＼なところを見て歩いたが、彼女は格別に珍らしいとも思はないし、驚きもしなかつた。一夜、健造や叔母と一緒に或る宮殿のやうな劇場で、生れて初めて芝居と云ふものを見たが、それも彼女には身にしみなかつた。これほどの解り切つた嘘を、まことらしく泣いたり喜んだりする人たちの氣が知れなかつた。健造が、役者の繪葉書を丹念に集めたり、紋入りの手拭を買つたりするのが、この上なく莫迦けて見えたりした。

かうして、あはた／＼しい三日の後に、いよく上野から奥羽線の夜汽車に乗りこんだ時には彼女はほつとした。

もう秋の初めだつたが、汽車の中は蒸れるやうに暑かつた。

「少し窓を開けないか」

健造は、美津子に窓を開けさせると、今朝から読むことの出来なかつた新聞を熱心に読み始めたが、それを讀んでしまうと黙つて空氣枕を取り出して、美津子の方へ頭を向けて、長々と座席の上に横になつた。

ほかの乗客も、ほつ／＼と横になりだした。先刻から、三つばかりになる子供をしきりにあやしてゐた若い女も、やがて子供を抱いたまゝ、赤い手がらをほんやり電燈に照したまゝ、クツシヨンの上につつぶしてしまつた。

かうして、汽車が大宮を過ぎた頃には、一車は悉く眠りに落ちたが、美津子だけは、時々すり落ちさうになる夫の頭を枕の上に直しながら、端然と坐席の上に坐つ

てゐた。時々眠りが襲つて來なくなかつたが、自分の寢姿を、他人に見せる氣になれなかつた。彼女は時々途切れる意識を、ほんやりまた取りかへしながら、終夜、とりとめもなく、いろ／＼なことを思ひ出してゐた。

あの不安な最初の一夜から、四日間の温泉宿のこと、それから、初めて夫を待ち明した一夜のこと——そんな時のことが、一つ一つ頭に上つて來た。それがみなひどく異常なことのやうにも思へたが、また、驚くに足りないことのやうにも思へた。曾て華やかな結婚を空想したことなかつた彼女には、同様に、今不幸な結婚と云ふ感じもなかつた。凡ては當り前だ、當り前以上でもなければ、當り前以下でもない。みんな、自分が思つてゐた通りだつた。——さう思つて、彼女は、彼女だけの満足を感じた。

彼女は、寢ぎたなく油汗を浮べた夫の顔に目を落したが、憎しみも起らない代り

には、親しみも起らなかつた。彼女に取つては恐ろしく嚴格な、昔氣質の父の代りに酒好きな汗臭い若者が、そばに寢てゐるに過ぎなかつた。

一四

彼等が、東北の或る小驛に着いたのは、翌朝のまだ早い頃だつた。何時の間にか降出してゐた小雨は、山々を濃緑に濡してところ／＼に、煙のやうな霧を残してゐた。南ではまだ汗ばむほどの朝が、此處では、肌粟を覚えるほど冷えてゐた。

五十餘りの頭の、禿け上つた町長を初めに、十五六人の人たちが、停車場に出迎へてゐた。

「いや、何うも。いや、何うも」

健造が、幾年も前から稽古してゐる置いたやうに、物馴れた調子で挨拶を受けて

るるのを、美津子は、別な夫でも見てゐるやうに眺めてゐた。構内の巡查が、兵隊のやうに手を舉げて、改まつた敬禮をするのにも、何となく新しい境涯が感じられる気がした。

かうして、彼等の長い官吏生活が始められた。

氣候の峻烈なこの地方では、人々は何うしても酒杯に親しまねばならなかつた。秋の農繁期に引き續くあの長い長い冬籠り、雪の壁で閉ぢこめられたあの退屈な屋内生活、その無聊と單調を破るものも酒であるし、人々を寒氣に戦はせるものも酒であつた。實際、かうした退屈な期間には深く切り抜いた炬燵にもぐりこんで、酒でも引き寄せて置くよりほかには、暮しやうがないのであつた。だから、何處の町々でも、必ず、その地方の酒豪と呼ばれるやうな、度外れた大酒家が現れてゐた。而も不思議に、さうした大酒家が、その土地の有力者と仰がれてゐた。

健造は、すぐにさうした人々と飲み仲間になつた。無論、人々はこの珍らしい飲み仲間を、自分たちの名譽として受け入れた。そして、その長い冬が終つた頃には、彼は酒好きの、物解りの好い、若い郡長として、一郷の人氣を集めるやうになつてゐた。

人々が彼を物解りが好いと言つたのは、事實、嘘ではなかつた。彼が赴任した町は、その地方の或る繁華な町に近い温泉場で、この附近の、相當に名高い遊樂場の一つだつたが、前任者の苛酷なほど厳しい取締りが町民の怨嗟を買つてゐることを見て取ると、一つはそれに對する反動もあつて、彼はまた極端にその取り締りをゆるやかにした。彼は町の藝者や酌婦の行動に對して、殆んど無制限な自由を與へたばかりでなく、前任者が峻烈に劾ねつけてゐた時々の町民の招宴などにも、書生のやうに氣輕に出かけて行つた。

美津子は、さうした夫の行動を多少あぶなつかしく感じないではなかつた。しかし、現に、夫の人望が次第に高まつて来るのを見ては、それを止めだてする氣にもなれなかつた。

かうして彼は、二年間を勤め上げた。彼の治績があがつたと言はれた。そして、一郷の人氣が或る頂上に達した時に、彼は破格の榮轉として、縣の方の或る相當に重要な椅子を與へられた。

彼は其處でも相當な成績を挙げた。そしてそれから四年後には恰度その頃初めての代議士に當選してゐた父親たちの盡力もあつて、變則ではあつたが彼の故郷に近い或る繁華な港町の郵便局長として再び西の方へ歸つて行つた。

かうして、その最初の官吏生活に成功した彼が、新らしい任地に行つた時には、更に烈しい蕩兒になつてゐた。其處には、南方の港町らしい明るい灯が待つてゐた。その上に今初めて、志を得た父親の勢力が、彼自身の後光として、この狭い町に差しこんで來てゐた。彼はその頃めき／＼と賑らんで來たらしい父親の懐をあてにしては無理な借財をした。彼の身邊は絶えず賑やかだつた。

が、外で如才なく賑やかな彼は、内では淋しくいらだゝしかつた。たまに夕方早く歸つて來た時などにも、彼は絶えず不機嫌に、澁面を作つてゐた。そのいらだゝしさが何處から來るか、彼自身にも解らなかつた。そのいらだちの頂上に於て、は彼よく妻に向つて手を挙げたが、美津子は、顔の筋一つ動かさないうで、澄み切つた眼で、ちつと夫を見上げてゐるほかには、何もしなかつた。その落ち着き拂つた態度が、ますます彼をいら／＼させた。

「俺に何が不服なんだ？」

彼は妻にさう言ふことがあつた。

「私何も不服はございませんわ」

「嘘言へ。その顔を見ろ。甘くも辛くもないやうな顔をしてるぢやないか」

「さようでございますか。私の性分なのでございませう」

彼はまた、あの結婚當時に感じた底の知れない冷たさを、感じなければならなかつた。

かうして、また別の四年が過ぎた。が、その時或る思ひがけない出来事が、この一家の上に落ちて來た。

それは、うらくかに晴れた或る小春日の午後だつた。昨夜もまた夜通し健造を待つた美津子は、形ばかりの遅い晝飯を済ましてから、静かな奥座敷で横になつてゐ

た。明るく障子に映る鉛色の西陽を額に感じながら眠るともなく醒めるともなく、うつら／＼して居るのが、堪らなく好い氣持だつた。

恰度その時、誰かゞ、慌しく廊下を走つて來る音がした。

「もう歸つてゐらしたのか知ら」

美津子はさう思つて、頭を枕から離した。

「奥様」と言つて、障子から突き入れて居る女中の顔は脅えたやうに青かつた、

「一寸るらして下さいまし」

「何うしたの？」

「あの、巡查さんが……」

美津子が出て行つた時には、もう四人の男が、玄關の間に立つてゐた。

「裁判所ですが一寸調べさせていただきます」

一人の巡査をつれた三人の背廣服の男がそのまま奥へ通つて行つた。表には、自動車乗りすてゝあつた。

彼等が一束の紙きれを抱へて再び自動車で歸つて行つたのはそれから三十分とはたゝない頃だつた。

「夫が何うかいたしましたのでございますか」
歸りがけに美津子が訊くと、

「いや、なに、何でもありません」と言つて、逃げるやうに彼等は歸つて行つた。美津子は、不安な顔をした女中たちと一緒に、しばらく、暗い茶の間に立つてゐた。

その夜、健造はたうとう歸つて來なかつた。

一六

翌日の新聞は、この地方の新聞ばかりでなく、大阪の大新聞までが、郵便局長官金費消事件の記事でその大部分を埋めた。そしてこの刺戟的な文字に満ちた紙きれが、美津子の父親をぶる／＼震へるほど怒らしめるべく、健造の父親が郷黨に占めた地位を根こそぎ覆へすべく、不幸な妹を遠く東京に追ひやるべく、町々村々に配られて行つた。

その記事で、美津子は初めて何が起つてゐたかを知つた。

擧げられた金高は三千圓に足りないものだつた。無論、健造にすれば、何かの都合で、一時の融通をつけたものに違ひなかつたが、事實それは、健造たちの一族に取つては、大きい金高ではなかつたが、その事實がすでに摘發されては、もう何う

にもならなかつた。

豫審も公判も、みんな有罪だつた。そして、それから半箇年の後には可なりの金をかけた控訴も、中央の或る大官への運動もたゞ三箇年の牢獄生活で酬いられるより仕方がなかつた。刑の執行猶豫さへも與へられなかつた。

豫審が済むと美津子は、一度、彼に會ひに行つたが、顔を合せては見ても、どちらにも、殆んど話すことがなかつた。差入れやその外の、二三のごく軽い用事を話してから、美津子は普通の心持で歸つて行つた。しかし、その晩、床についてから、彼女はふつと今日の夫の顔を思ひ出した。入牢以前よりも、むしろ健康さうではあつた。しかし、その顔の與へる印象は、全く別人のやうだつた。これまでのあの鋭い眼の光りや、黒く油ぎつたやうなところが痕もなく消えて、何處となく平和な、靜かな澄んだものがあつた。美津子はしばらく、床の中でその澄んだものを見つめ

てゐたが、ふいと思ひがけなく、眼がしらの熱くなるのを感じた。「おやッ」と思つた。が、さう思つた時には涙が、枕の上に、小さい痕をつけてゐた。

それは、言つて見れば、刑中の夫に對する、ごく軽い、一時的の憐愍に似た心持であつたかも知れない。しかし憐愍にしろ憎惡にしろ、彼女が堅い心の地殻の下で、夫に對する何かを感じたことは、これまでにないことだつた。

實際、彼女は、その後によくこの時の夫の顔を思ひ出した。そして、何となく夫の出獄が待たれた。その時にこそ、夫が出獄した曉にこそ、自分たちの好い生活が始まるのだ。——彼女はほんやりと、さうした豫覺を持つやうになつてゐた、だから、健造がいよく入獄と決つた時、この事件にすっかり怒つてゐた美津子の實父が、彼女を自分の手許に引き取らうとしたが。美津子はそれに應じなかつた。彼女は、健造の父の家に歸つて行つた。

が、彼女が歸つて行つた家はその時はもう打ち碎かれたやうになつてゐた。縣會議長を初めそのほかのいろ／＼な公職をなけうつた父親は、僅かの間に見違へるほど老いこんでゐたし、教職に就いてゐた雪子は、狭い人目を避けるために東京に行く準備に急いでゐるのだつた。敏雄もその春に、九州の學校に去つた。

一七

健造が病監に移されたと云ふ報知を受けたのは、翌年の夏が漸く盛りに入らうとする頃だつた。父親が狽て、監獄に問ひ合せたところによると、多少結核の疑ひがあるとのことだつた。父親は再び血まなこになつて、保釋の運動をした。その結果、その年の秋になつて、漸く出獄を許されたが、その時には、もう再び立てないほどに病勢が進んでゐた。

屈辱と病氣とに打ちひしがれた健造は、誰の目にも痛々しく見えた。出獄の日は、美津子も若い叔父に連れられて、監獄のある町まで出かけて行つたが、差入れ屋の二階で初めて顔を合した時にも健造は口がきけないほど、弱り切つてゐた。町から少しばかりの汽車の間は幸ひにほかの乗客がゐなかつたので、叔父は何かと元氣さうに話しかけた。

「うむ、大變ぢやつたのう、こつちも随分心配しとつたよ。からださへ丈夫ならの、なあにまだ若いのぢやけに、ちつとぐらゐる落度があつても、へこたれることアない——さう云うてみんなを話しとつたのぢやが、からだア悪うしちやアのう。よつほど辛かつたかの？」

叔父は、健造の氣を引き立てやうとするやうに、わざと親しみのあるお國言葉をまる出しにして、元氣に言ひかけたが、健造は、たゞ淋しさうに微に笑ふだけで、

殆んど口を利かなかつた。たゞ時々、うつろな眼を舉げて妻の顔を見た。それから、その眼を、秋に色づいた窓の外に投げた。

彼等は、村に近い停車場前の二階で、それとなく日の暮れるのを待つて、彼等の村へ歸つて行つた。

それから死ぬるまでの半年を健造はそこで過ごした。床についてることが多かつたが、それでも、時々、氣持の軽い時などには、一人で縁がはに出て行つて、弱い秋陽に斑に染出された庭木立などを、珍らしさうに眺めてゐた。

「今日はこゝで、みんなと一緒に食つて見たいな」

さう言つて彼は、父親や美津子たちと一緒に、明るい座敷で夕飯を食ひたがつたりした。

一度、東京にゐる雪子から、何うして集めたのか、俳優の名などを染こんだ手拭

ひを集めてそれを浴衣に縫ひ合せて、送つて來たことがあつた。芝居の好きだつた彼は、それを子供のやうに喜んだ。

「おい、これをそこに掛けて見て呉れ」

しばらく手に取つて、嗅ぐばかりにして楽しんでから、更にそれを衣桁にかけさせて何時までも眺めてゐた。

「雪子の奴、なか／＼洒落た眞似をするやうになつたな」

さう言ひながら、彼は眼に涙をためてゐた。

實際、健造は今、全く新しい光の下に、すべてのものを眺めるやうになつてゐるらしかつた。それは、心の變化と云ふよりも、むしろ、新しい感覺の更始とでも云ふべきものゝやうだつた。長患ひをした後のあらゆる人が感じる、あの、すべてのものに對する新鮮な、生き生きした、親しみ深い感覺が、彼のすでに蝕まれ盡した

肉體の中に醒めて來たらしかつた。

一八

美津子は、さうした夫の心を見違へるほど變つた夫の心を、悼ましく眺めてゐた。而も、さうした夫の變化が、美津子の心にも、或る深い影を投じた。

死ぬる二箇月前の、正月の末に、健造は第三回目の咯血を起した。それは、父親たちを青ざめさせたほど烈しいものだつたが、醫者の簡単な注射が濟むと彼は倒れるやうな眠りに落ちた。

それからよほど經つてからだつた。突然、ほかりと眼を開いた彼は、

「ほう、やつぱりゐたのか」と呟やくやうに言つた。枕元には美津子だけが坐つてゐた。

「よくお休みになれましたわね」

「よつほど長く寝たかい？」

「え、随分よくお休みでしたわ」

「ふうむ。……やつぱりさうかなあ。ゐたのかなあ」

健造は、不思議さうに美津子の顔を見ながら言つた。

「何うかなさいました？」

「うむ、ちよつと。……お前はもうゐないのかと思つてゐたよ」

「私、さつきからづつと此處にゐましたわ」

「ふむ、さうかなあ」

彼はまた、深い眠りに落ちた。その、かすかに微笑した、静かな寝顔を、しばらく、美津子は眺めてゐた。と、急に、夫の死床に自分も一緒に倒れて見たいやうな、

不思議な愛着が、彼女を捉へた。それは、ごく短い瞬間に、彼女の心をかすめたに過ぎなかつたが、その感覺は、會て、未決檻で會つた夜のあの涙と同じやうに、彼女の意識の底に、深い痕をつけた。

彼女は手巾を取り出して、汗ばんだ夫の額を拭いてやつた。

實際、その頃から、不思議に醒めて來る自分の心を、肉體を、彼女はむしろ驚きの目で見つめた。それはたゞ夫に對してばかりではなかつた。終日、たゞのそりく、家の廻りを歩いてゐるやうな、氣拔けのした父親の姿にも、健造や雪子にたゞびくくしてゐるやうな若い母親の姿にも、そのほか、地に落ちる若木の影にも、寒さうに佇む小鳥の姿にも、彼女の心は動いた。あらゆる心が解る氣がした。そして、あらゆる存在が悼ましかつた。

「憑き物が落ちた」——彼女は自分で、そんな氣がすることがあつた。

而も、かうした時期に、敏雄から受け取つた手紙は、彼女にはこたへた。彼女はそれを見て泣いた。そして、それまでたゞ子供だとはかり思つてゐた敏雄が、これほどまでに近く、彼女の心のそばにゐることを、不思議に思ひ、當然にも思つた。しかし、かうして彼女の心が醒め切つた時には、健造はもうこの世にゐなかつた。

一九

埋葬の日は、うちぢゆうが、朝早くから急がしかつた。

お寺との交渉、葬儀屋との懸け合ひ、會葬者の接待の準備、さうしたことは凡て若い叔父が引き受けることになつてゐた。事實、近くの町で請負師のやうなことをして居る叔父は、商賣ものゝ下の緊つた半づほんなどを穿きこんで、昨日一日を自轉車で飛び歩いたのだつたが、田舎では萬事がうまく捗らなかつた。辛と葬儀屋が、

この地方には珍らしい大きな白木の寢棺を町から運んで来た時は、もう翌日の午近くで、氣の早い會葬者たちの紋附姿が、淋しい田舎道を寺の方へ集まつて行くのが、小高いこの家の庭から見下される頃だつた。

「おい、みんな集まつた、集まつた。もうぐずぐずしちやあ居れんぞ。雪子さん、雪子さん、あの花は何うした。あの花は……」

叔父は急がしさうに、こんな風に叫んだ。雪子や美津子や、近所の手傳なども集まつて来た。

「何うも、かう云ふこたア俺らにやあよう解らんわい」

雪子が甲斐々々しいエプロン姿で、アルコオルで死骸を拭いてるのをほんやり眺めながら、叔父が手傳ひの男に言つた。

「何うするんけ？ 寝たまゝで棺へ入れるんけ？」

その男も、珍らしさうに、ほんやり眺めながら言つた。

「おう、健造の遺言でなあ。……あれも可笑しな男よ。ほかのこたあ何んにも言はんで、葬式のことばかり莫迦丁寧に遺言しよつたよ」

「寝たまゝ棺へ入れるなあ耶蘇ぢやねえか」

「うむ、さうばかりでもないが、まあ耶蘇臭いよのう」

次第に「耶蘇臭い」柩が出来上つて行つた。

大きい棺の中には先づ藁がつめられ、白い布がかけられて、その上に、骨ばつた健造のからだ載せられた。その頃には、若い母親や敏雄たちも、この部屋に集まつてゐるが、大抵は雪子一人が、物馴れた手つきで始末して行つた。

「これへ花を入れるんかい？」と叔父が訊いた。

「ええ、兄さんはさうおつしやつたんですけどね。お母さん、何うしませう！」

「さうおつしやつたのなら、花があれば、入れて上げた方が好いでせうね」
母も美津子の顔を顧みて言った。

「花は用意してあるんですけどね。ちやあ、やつぱり入れませうね」

それから三十分ばかりもした後には、薄く化粧された健造の顔が、小さいガラス板の下で、寒さうに白い水仙の花に埋れて、横たはつてゐた。

「まあ綺麗に。……お兄さんも、よくまあこんなことを考へつかれたものですわねえ」

母はさう言つて、しばらく棺の中を見つめてゐた。

が、事實は、會て子供の時に見た、クリスチャンの友だちの柩の記憶が、死に迫つた健造の頭に浮かんで、かうした遺言をさせたのに過ぎなかつた。

二〇

入棺が済むと、棺をかこんで、家族だけの黙り勝ちな小さい別宴が開かれた。酒も運ばれたが、誰も盃を取らなかつた。たゞ、棺前に置かれた膳だけは、雪子が、伏せてある盃を起して、酒を注いだ。それを見て、美津子は涙を浮べた。

「うむ、俺も一杯健造に差さうかな」

父親は微笑して、馴れた手つきで飲み干した盃を、棺前の膳に置いた。雪子がまた、なみなみと酒を注いだ。

葬儀は、村ざかひの小高い山に建つた小さい寺で行はれた。

若い叔父の指圖で、門前で行列を整へた時には、それでも、この地方では珍らしく賑やかな葬列になつた。父親が、あの事件以來絶えて着なかつたフロックなどを

着こんでゐるのも、何となく晴れがましかつた。百姓たちの擔いだ白い棺についで、制服姿の敏雄が立ち、それに續いて薄く化粧をした白絹姿の美津子が立つたが、それが痛々しいほど若くて美しかつた。

「若えにまあ、いとおいしいのう」

さうした呟きが、物珍らしげに道ばたに集まつてゐる女たちの間に傳へられた。かうして、この賑やかな葬列が可なり長い田舎道を縫つて、漸く村はづれの寺まで来た時には、其處にも可なりの村人たちが集まつてゐた。平常ひやうきん者で村ぢゆうに通つてゐる五十過ぎの住持が、今日だけは別人のやうな顔をして鳴らした最初の鐘を聞くと、人々は、庫裡のいろりのそばからも、大きい椿の木蔭からも、古い井戸のそばからも、ぞろ／＼と本堂に流れて行つた。そして、人々が漸く座に就いて葬場らしい静かさが来た頃には、正面に小高く安置された棺のそばに、少し

離れて、父親や、美津子や、敏雄たちが、うつむき勝ちに居流れてゐた。

單調な讀經が一時間近くも續くと、今までひつそりしてゐた一座の中に、時々、咳拂ひなどが聞えて来た。もう傾きかけたらしい日影が、ぱつと障子の一部に當つて、それが、ほの暗い本堂を、一層蔭深くした。

讀經が濟むと、今まで會衆の眞先に坐つてゐた、小商人のやうな風采の、小柄な鵜崎代議士が立つて、弔詞を讀み始めた。ごく短い簡單なものだつたが、それでも、「君不幸にして晩年其志を得ず、あたらず有爲の才能と前途ある春秋を抱いて長逝せりと雖、君が高邁不羈の英靈は、永へに吾人感奮鞭打せずんば措かざるなり」と云ふ一節に至ると、父親が先づ眼をしばたいた。それに促されて、美津子や、雪子たちも、また新しい涙に襲はれるのだつた。

さうして彼女等が、いよく最後の焼香に立つた時には、殆んど一人では歩けな

いほどに、彼女等の眼は濡れてゐた。

「ほんとに、いとおいしいことぢやのう」

さうした囁きが、此處でもまた、村人の間に繰返された。

敏雄も、美津子のその姿を痛々しげに見守つてゐた。

二二

會葬者が一人々々焼香をしてすつかり歸つて行つてしまつたのは、もう暮れに近い頃で、障子の日影も黄色く薄れてゐた。

「さあ、これからいよく御別れだ」

親族席のうしろの方に坐つてゐた叔父が、棺のそばへ立つて行つた。

父親が、住持の方へ行つて丁寧にお辭儀をする頃には、みんなも何か放たれたや

うな氣持で棺のそばへ寄つた。

「故人の希望で、これからお別れをしますので」

父親が、何か辯解するやうな調子で、住持に話すと、

「いや、結構なことでございます」と、住持も答へてゐた。

叔父の手で、蝶つがひになつた棺の蓋の一部が擧げられるとすぐに、切り抜きになつた小さいガラス板の下に、變りはてた健造の顔があつた。弱い光線の下で、青白いガラス板の下で、水仙の艶な青葉を浮ばせてゐる屍像は不思議に蠱惑的なものだつた。

「まあ綺麗に出来ましたこと」

雪子の眉のところから爪立ちして顔を入れてゐた若い母が雪子の耳のところまで囁いた。

「まことに、好い御往生でございますな」

住持は、もう幾度も言つたことを、また父のそばで繰返した。

「惜しいことをしたもんだなあ、これだけの立派な男が」
かう言つた叔父が、急に、思がけなく、大きい音をさせて鼻汁をすゝり上げた。

「安さんも別れが惜しいよのう、子供の時から仲善ぢやつたけに」
住持も、今度はお國言葉で、叔父を慰めるやうに言つた。
それを聞くと、叔父は一層はげしく鼻汁をすゝり上げ始めた。

「立派なお顔ね」

ふいと美津子が、敏雄の顔を見上げて、彼の肩のところで囁いた。

敏雄はちよつと美津子の顔を見た。と、その視線につれて彼も目を落すと、美津子のしなやかな白い指が、冷いガラスの一點をじつと靜かに壓へてゐた。恰度それ

は、蒼く澄んだ廣い額が、びたりとガラスに着いてるところだつた。

「まるで別人のやうですね。何だか嬉しくなるやうに穩かで、靜かで……」

敏雄は、兄に何かを通はせやうとでもしてゐるやうな嫂の指を見つめながら言つた。

「でも、つまらないわね。こんなになつてしまつて」

美津子は指を舉げて、かすかに微笑した。

「もうみんな好えだらうな」

叔父が、自分の悲しみを打ち切らうとするやうに言つた。

「うむ、もう蓋をしたが好いだらう」

父親も、住持の心持を憚るやうな調子で言つた。

間もなく、健造の柩は、もうすつかり暮れてしまつた、可なり峻しい山道を、淡

い提燈の灯に照されながら、本堂上の墓地まで運ばれて行つた。
美津子も、敏雄に手を把られて、後れながらに、人々の後から登つて行つた。

三三

翌朝は墓参りで、また、うちぢゆうがごたくした。昨日の今日にしては、みんな割りに早く起きたのだつたが、それでも女たちの着物定めや化粧の間に思はない時間が経つた。出かけたのは、雪子と敏雄と美津子とそれに、昨日の葬式に留守番をした美津子の里方の老母と、手傳ひ半分に來た遠縁の若い娘とだつた。

墓とは云つても、それはまだ掘り返した黄ろい土饅頭の上に太い白木の棒が立つて居るに過ぎなかつた。使ひ残しの線香の束が、赤い包み紙のまゝで堅く地に氷つてゐるそばに、虚つぼの手桶が、これも氷りついて、横倒しに倒れてゐた。

「ふうむ、さうかいの」老母は何を思つてか、墓標を見つめながらそんな風に呟いたが、すぐあたりを見廻して「ぢやけんど好えよのう、あたりが廣うて。此處なら日本國ぢゆうが見える」と言つた。

「ほんとによござんすわねえ、こんなところに朝晩ゐたら……」

雪子も、老人をいたはるやうにそんな風に言つて、下の方を見おろした。其處には、低い山に挟まれた平野が長く帯のやうに擴がつて、その中を、白い河が蛇の腹のやうに縫つてゐるのが一目に見渡された。

「わしも、のう美津、死んだらかう云ふところへ埋めて貰ひたいよのう」

「それもよござんすわね。あんなごたくした町中のお寺なんかよりも」

「さうよ。わしやア何うも生れつきごたくしたことが嫌でのう」

老母は、薄さうな目をしよほくさせながら、何時までも下の方を眺めてゐた。

「さあ、敏さん、若い役に一つ下に行つて、水を汲んでらつしやい」
雪子が思ひ出したやうに言つた。

「水は澤山でせう？」

昨日のがまだ一ぱい入つてゐますから」と美津子が言つた。

「でも。代へた方が氣持がよござんすよ……」。敏さん行つてゐらつしやい」

「お氣の毒ですわね。こんな高いところから」

「なあに、男ですもの、少しくらゐ働かなくちやあ」

雪子は無雑作に、元氣よくさう言つた。

敏雄も快活に、ころがつてゐる手桶を拾つて坂道を降り始めたが、何故ともなく
楽しい微笑が壓へ切れない力で、顔に上つて來るのを覺えた。それは、彼等の仲で
は殆んど言ふに足りないほど些細なことではあつたが、兎に角、嫂であるだけに、
その好意が嬉しかつた。彼はその好意を幾らにでも廓大した。また、それをどれほ

どに廓大しても好い氣がした。

敏雄が手桶を持つて再び上つて行くと、雪子はそれをなみくくと竹筒に注いでか
ら、持つて來た花を、美津子に指させた。

「さあ、これで綺麗になりましたわね」

雪子は氷りついた枯葉や、線香を、大きい手で掻き除けたりしながら言つた。

「ほんとに、お蔭さまで」

さう言つて美津子は、雪子にとも墓標にともつかない深いお辭儀をした。それに
續いてみんなも初めて、墓の前に頭を下けた。

二三

「さあ、もう歸りませうか」

しばらくして、雪子がみんなを促した。

「えい、歸りませう。もうお午を廻つたやうですわね」

美津子も、薄い冬の陽を仰ぐやうにして立ち上つた。

咲き残つた椿の花が、重さうに下つてゐる深い枝の下で、姿は見えないが、藪鶯が絶えず處を代へながら、チチツ、チチツと鳴いてゐた。

峻しい坂道では、足許の危い老母の手を取つてゐる敏雄は、遅れがちだつた。

「大丈夫？ お母さん、大丈夫？」

元氣さうにすん／＼降りて行く雪子のうしろから、美津子は時々振り返つて敏雄たちを見上げた。

「え、大丈夫、大丈夫」

敏雄もさう繰返しながら、ゆつくり降りて行つた。

一しきり峻しい坂道を降りて、稍なだらかな道に出た時だつた、其處に待ち合せ
てゐた美津子が、

「さあ、今度は私が代りますわ」と言つて、彼等に近づいた。

「いえ、よござんすよ。僕がお連れしますから」

「まあ、まあ、これでも私のお母さんだから」

美津子は無理に敏雄に代つて母親の手を把つたが、その時ふいと敏雄の方へ向い
て、

「今日お歸り？」と、聲を落して訊いた。

「え？」

彼女の言葉そのものよりも、彼女の鋭い眼が、むしろ狡さうに光つてゐる彼女の
眼が、彼をどきまぎさせたのだつた。

「今日學校へお歸りになる？」

「さあ。……今から歸つたつてしようがないのだけど」
「試験前だわね」

「えい、もう三四日しかないのですものね」

「困るわね。お父さまは何うしても歸れつておつしやるんでせう？」

「えい。父は何も知らないのだから。……今から急いで受けなくたつて、事情を言つて、あとでゆつくり追試験を受けた方が好いのですがね」

「さうねえ、さう出来たら好いわねえ」

恰度、本堂のそばに降りたところで、雪子が立つて待つてゐた。

「随分ゆつくりね」

「お婆さんに二人がかりですもの。大變ね」

美津子はむしろ快活に笑ひながら言つた。

「でも、それまでに一度お話しませうね」

と、雪子が向きに歩き出すと、美津子はまた聲をひそめて言つた。
「えい」

敏雄はまた探る様な眼を嫂に向けたが、その時、美津子は急に母親の手を放して、小走りに雪子の後を追つた。

姉たちの後について、車でうちに歸る間、敏雄の胸は地震のやうに揺れてゐた。それは、心では解つてゐて頭ではまだ解らない、なかば未知なものに對する恐怖ともつかない氣持だつた「いよく來た」——何となくそんな氣持がしてゐた。

そしてその全身をゆすぶるやうな烈しい鼓動は、うちに歸つて、おそい晝めしを食べる間も止まなかつた。彼は殆んど箸をつけなかつた。

二四

食事にはみんなが揃つてゐた。これが、健造が死んでからうちぢうが揃つた、またうちのものだけで食べる最初の食事だつたが、誰の頭にも、今更らしく兄の死が感ぜられた。

「やつぱり淋しいわね。ゐる筈の人がゐないと」

雪子が言ふと、若い母親も、

「さうですねえ前だつて、まあ奥の間ではかり食べてゐられたやうなものですけども、それでも、奥の間が明いてるだけでも何だか變でござんすわね」

「うむ。が、まあ仕方がないさ。何うせ隙の入つたからだだからな」
父も重い口調で云つた。

食事中にまた、學校に歸る歸らないの問題で、父親と敏雄との間に一寸した言ひ合ひがあつた。父親は何處までも歸れと言ひ張つた。敏雄が追試験の希望を持ち出したがそれにも父は賛成しなかつた。で、敏雄も、強くはそれを主張しなかつた。黙り勝ちな食事が濟むと、父親は炬燵のそばに蒲團を敷かせて、若い母に肩をもませながら横になつたし、雪子は東京の友達に長い手紙を書くために、書簡紙やペンを持つて離れの方へ逃げて行つた。もう三十を越えた雪子に、東京で或る若い戀人の出来たことや、どんなに急がしい日でも、毎日一度は必ず手紙を出してゐることなどを、美津子はそれとなく知つてゐた。そして、その事が——その分別盛りの老嬢、理智的な教育家にもなほやさしい戀などがあると云ふことが、美津子の心を寛けもし、親しみ深くもさせてゐた。

美津子が臺所仕事に立つと、敏雄も所在なささうに立つて、縁がはから庭を眺め

たり、佛間の出窓から外を眺めたりした。出窓からは一面に、冬枯れの田が見渡された。黒づんだ稻の切り株が、飛白のやうに單調に廣がつてゐる冬の田は、慰めない、寂しい景色だった。

「敏雄さんも、奥の間へお床を取らせて、少しお休みになつたら何う？」再びのそり／＼と居間の方へ歸つて行つた敏雄に母が手を休めて言つた。

「さうですね、少し休ませうかね」

「その方がよござんすよ、今夜はまた夜汽車だし、それにお顔の色も悪いやうだし」

「少し疲れたのかも知れませんか」

奥の間に行くと、すぐ女中が来て床を延べて呉れた。

「小夜着だけでようございますか」

「うむ、それで澤山」

何故ともなく、女中の出て行くのが待たれた。そして、女中が去ると、すぐびりりと襖を閉めて、小夜着を頭から引つ被つて。其處には、無限に幸福な空想の世界が彼を待つてゐた。彼は、貪慾な反蕩動物のやうに、今日の嫂の言葉や、眼の光りを幾度となく思ひ起した。そして、その中の甘味を出来るだけ多く噛み取らうとした。

「しかし、まだ早い！」

彼の心の何處かで、かう言ふものがあつた。彼は、空想に先走る時、それに裏切られることの苦さを恐れた、しかし、彼の「頭」の先で、彼の「心」が空想を追つた。

彼は小夜着の中で海老のやうにからだを曲けて美津子の來るのを待つてゐた。

二五

「敏さん、こちら？」

美津子が入つて来たのは、それからしばらくしてからだつた。
「あら、お休？」

敏雄が寝て居るのを見ると、美津子は一寸躊躇するやうに、敷居の上に佇んだ。
「いえ、ちよつと、横になつたの」

敏雄も少しどぎまぎして、それをごまかすやうに、元氣らしく跳起きた。
「さう。私はまた、おからだの具合でも悪いのかと思つて。でも、随分、お顔の

色が悪いわね」

「さうですか。やつぱり疲れてゐるのかも知れない」

敏雄は、何となく、圖星をさゝれたやうな氣がした。自分が今まで何を考へてゐたかをすつかり知りぬいてゐる嫂が、わざと白ばくれて、自分をからかつてゐる——そんな風にも考へられた。

美津子はちよつと黙つて、火鉢に炭をついでゐるだが、ふつと顔を上げて、

「ぢやあ、今夜はいよくお歸りね」と言つた。

「えい、父があゝ言ふんですからね」

「まあ、行つてゐらつしやい。お父さんも心細いのよ。せめて敏さんだけにでもしつかりして貰はなくちやあと思つてゐらつしやるのよ」

「それは僕にだつて解つてますけれどね。しかし、何も試験なんかにそんなにこだわらなくても好いと思ふんですけどね」

しかし、こだわつてゐるのはむしろ敏雄自身だつた。彼は、今度に限つて何故試

職が受け辛いのか、何故氣輕にこの家を去ることが出来ないかを知らなかつた。それを考へても見なかつた彼は、たまらなく退屈な仕事、たまらなく心に染まない仕事の待つてゐることを思つて、たゞいらくした。

「でもまあ、一週間か十日なんでせう？ 元氣に行つて受けてゐらつしやい。十日くらのぢき經つてしまひますわ」

「えゝ。だから、兎に角行つて來ます」

「さう。その方が好いのよ。學校にゐらしつて、お友達なんかにお會ひになつたら、またその氣になれますわ、屹度」

美津子はさう言つて、ぢつと敏雄の顔を見つめた。その眼を見ると、敏雄は、何故ともなく眼を伏せた。それは、今日あの山で見たのと同じやうな、不思議に狡さうな眼だつた。

「あゝ、昨夜、こんなものが出て來たのよ。」

突然、美津子が、思ひ出したやうに言つた。

「私、昨夜はあんまり睡れないものですからね、夜中にそつと起きて、お兄さんの日記を出して見ましたの。どんな氣持になつてゐらしたのかと思つてね。さうしたらね、これ、これが挟んであつたの」

美津子が懐中から取り出したのは、二つの小さい封筒だつた。それは敏雄には見覚えのある、桃色の小さい婦人用の西洋封筒で、一つには鉛筆で敏雄殿と書いてあり、一つには美津どのと書いてあつた。

二六

「書き置き」

「えい、まあ書き置きみたいなものね。敏さんのは何が書いてあるか解らないけれど」

「この二つしかなかつたの？」

「えい、これつきりよ。まあ開けて御覽なさいな」

敏雄は封筒を手にとつた。何故ともなく、嫂の目の前でそれを読むことが躊躇された。彼女の前で讀んだために、思はない運命の狂ひが出て来る。——彼は漠然とさうした怖れを感じたが、讀まないわけには行かなかつた。いやにねばつこい封筒の端を切ると、彼はすぐに讀み始めた。

敏雄——

あらゆる幸福を見捨てなければならぬ一人の男から、あらゆる幸福を望み得るお前に、ただ一つのことを言ひ残す。

欠

欠

「やっぱり兄さんはしつかりしてたのだなあ」

「しつかりしてました？」

美津子が聞きとがめるやうに言つた。

「えい。最後まで本統にもものを見ようとしてたのが豪いぢやありませんか」

「でも、私には何だか冷酷のやうな気がして……」

さう言ひながら、美津子の眼はまだ濡れてゐた。

余は夏の花のいのちが
美津子の眼に
同感

二八

「冷酷！……これを書いてる兄の氣持を、そんな風に見ても好いものか知ら」

「さう見てはいけないのでせうか」

「いけなくもないでせうが、しかし、誰も悲しみに溺れ易い、死に迫つた瞬間に、

うかとその悲しみに乗ぜられまい、自分を見失ふまいとして居るところに、如何にも兄らしい眞面目さや苦しさがあつたぢやないですか」

「でも、私にはそれが不服なのよ。何故もつと正直に、後悔なら後悔、悲しみなら悲しみをせめて私たちだけにでもぶちまけて下さらないのかと思つて」

「さあ、さうすれば、無論、兄さんはもつと樂になれたでせうけど、しかし、同時に生き残つた嫂さんに或る負擔を負はせることになりますからね。兄にはむしろ、それが考へられたのでせう」

「さうでせうかねえ。随分兄さんらしくないわね」

「兄さんらしくない……」敏雄は美津子の言葉を繰返してから、ゆつくり考へ考へ言ひ續けた。「しかし、これまでの兄さんとはまるで別な考へ方をするやうになつたところに、兄さんは生き甲斐を感じてたのぢやないですかね。我執——さう、誰

でも死ぬる前に猛烈に起つて來るらしい我執をすつかり捨て、しまつたと云ふ氣持の中で、兄は最後の安心をしたのぢやないですかね。僕の空想かも知れないけども」

「さうでせうかねえ。でも、よく解らないわね」

美津子はさう言つて淋しさうに眼を伏せた。が、しばらくすると、彼の女は全く別人のやうな、快活な聲で言つた。

「でも面白いわね。敏さんに早く結婚しろなんて」

「不思議ですね。あの兄がこんなことを考へてゐたのかと思ふと」

「早くお貰ひなさいよ。それこそ三國一のお嫁さんでも」

「貰ひませうかね。嫂さんのやうな好いお嫁さんでも捜し出して」

「まあ、何時の間になんにお世辭が巧くなつたの？」

美津子は蓮葉な調子で笑つて例の狡さうな深い眼で、敏雄の顔を見つめた。

「それよりも嫂さんこそ、遺言通りにまたお嫁さんに行つたら好いぢやありませんか」

敏雄も笑ひながら、冷かすやうな調子で言ふと、

「お嫁さん？……もう澤山」

美津子は殊更に顔をしかめて見せて、からくと、如何にも愉快さうに笑ひ出した。

それは、敏雄がこれまで見たことのない心から楽しさうな彼女の笑ひだつた。「でも兄貴のことだから、嫂さんを此儘朽ちさせるのは惜しいくらゐには思つて

たのでせうね」

「さうよ。私も惜しいから、これからはもうお嫁になんか行かないつもりなのよ」敏雄は、嫂の言葉そのものよりも、むしろその調子に眼を見張つた。それは會て

想像したこともないほど生き生きした延びやかな氣持で裏つけられてゐる氣がするのだつた。

「でも、また淋しくなるわね、敏さんも行つてしまふし、雪子さんも東京にゐらつしやるし、……でも、またすぐ歸つてゐらつしやるわね」

美津子はさう言つて、散らばつた書簡紙を封筒に收め始めた。

二九

その日の夕暮に、敏雄は停車場のある町に俤で發つた、一家ぢゆうが賑やかに、玄關で見送つた。

「ぢやあな、試験が濟んだらすぐ歸つて來い」

「流石に父親にも、淋しさが來たらしかつた。」

「ではね、私はもう當分會へないかも知れないからさう言つて雪子も、俣のそばに寄つて來た。」

「下宿はやつぱり以前のところ？」

敏雄はかつて人々が可笑しがるほど仲のよかつた姉と、今度は殆んど何一つしんみりとは話してゐないことを思つた。で、その埋合せに、長い手紙でも書かうと、漠然と思つたのだつたが、姉はその心を見て取つたかのやうに、

「えい。だけど、もう度々手紙なんかよこさないで好いから、しつかり勉強して下さいな」

姉の教育家らしい冷い言葉が何となく不愉快だつた。が、その時には、彼の心持は、人々のうしろからちつとこちらを見つめてゐる美津子の方に奪はれてゐた。「ぢやあ行つて参ります」

車夫が梶棒を擧げると、敏雄は大きい聲で言つて、今一度美津子の方を見ながら、誰にともなくお辭儀をした。

「では、左様なら」

そばに立つてゐる雪子だけがさう答へた。そして俣は、立關からまつすぐに降りてゐる短い坂道を、往來の方へ下り始めた。

もう見慣れた景色ではあつたが、小さい繪のやうに整つたこのあたりの山郷が、特別に深い色彩で、敏雄の目に映つた。淡い夕靄の立ちこめた寒さうに白い村ざかひの溪流を渡ると、俣は高い崖に沿つて、川を傳つて走つた。幌のない俣の上は、身を切るやうに寒かつた。敏雄は外套の中に埋めるやうに身を包んで、この三日間のことを、たゞ食べるやうに思ひ起した。

……すべてが、濟まないほど楽しかつた。

彼は、あの眼を思ひ出した。戀するものゝみが知つて居る、あの狡さうな探るやうな、しかし笑ひに光つてゐる眼を思ひ出した。彼はまた、あの悲しみの中にもなほ處女のやうな感じ易さや、しなやかさや、明るさを持つてゐた美津子のからだを思ひ出した。そして最後に、美津子の將來を兄から託されたことを思ふと、彼は身内がむづ痒くなるやうな或る微笑と一緒に、或る亢奮を感じた。

「しかし嫂さんのは何う云ふ心持なのかな？」
たうとう、言葉に出して考へた。

實際、戀ごとには初陣の敏雄には、美津子に就てのあらゆることがたゞ神祕だつた。彼は、美津子の心が自分に動いてゐるやうに思つた。しかし、あの狂氣のやうな悲しみや、追憶の中で、彼女の心が何うして自分に動いて來るのか、解らなかつた。彼は先づそれに躓いた。そしてその躓きの中で、何かを得てゐるやうで而も何

ものをも掴んでゐない空虚さを感じた。

彼の心は焦つた。そしてその焦立たしさが、一層はつきりした戀ごころを、彼の中に組み立たせた。

三〇

敏雄を送り出すと、美津子はそのまゝ奥の間に引き返して行つた。父や雪子たちは、茶の間の圍爐裡のそばに集つたやうだつたが、そこでゆつくり茶などを飲む氣にはなれなかつた。彼女はたゞ、自分一人であるたかつたのだ。

しばらく、暗い電燈の下で、彼女はほんやり坐つてゐた。何も考へてはゐなかつた。が、何かしら或る取りとめのない亢奮が、かすかに彼女の全身を揺つてゐた。手や足や肩が不意に、ピクリと震へ出しさうな氣持だつた。

火の氣のない部屋の中は、寒くて佗しかった。美津子は目を舉げて、すつかり取り片づけられた部屋の中を、今更らしく見廻した。

と、其處に、浅い呼吸をしながら、窪んだ光つた目で天井を見つめてゐる健造の寝姿が、もう遠い記憶のやうに思ひ出された。彼女はしばらく、その姿に見入つてゐた。が、不思議に、それが自分の夫だと云ふ氣持はしなかつた。それはたゞ、死に近い瘦せさらばつた一人の「男」に過ぎなかつた。

「これで好いのか知ら」——彼女はふとさう思つた。が、それが好いとも悪いとも思ひ浮ばないうちに、彼女はもう次の考へに飛んでゐた。それほどに、その反省は力弱いものだつた。

彼女は、健造の死んだ日の氣持をはつきりと思ひ起してゐた——その日の健造は、どん底まで惨めだつた。何と云ふ、無残に打ちひしがれた姿だらう。「好い往生だ！」

と、人々は言ひそやした。實際それは、彼女自身も、人々にさう言はれると、それを信じたくなるほど無力な死だつた。が、夫のこの「無力な死」の何處に「好い往生」があつたか？ あの遺言を書いた時の——恐らくそれは死の二三日前だつたらうが——あの自信が何處にあつたか？ 彼女はそれは見のがしはしなかつた。彼女があの日叫ぶやうに泣いたのも、髪を切らうとまで言ひ出したのでも、たゞ、さうして無残に打ちひしがれた健造に對する狂氣のやうな憐愍であつた。が、さうした憐愍の中で、見た健造はもう、彼女を恐れさせ脅かして來た昔の夫ではなくて、たゞ、打たれ惱んで居る人類の一人に過ぎなかつた。……が憐れむものさへも、今はもうゐなかつた。

部屋の中は、凡てが忘れられたやうに、静かにがらんとしてゐた。たまらないほどの淋しさだつた。

美津子は、火の氣のない火鉢の上に突つ伏してしばらく、土のやうな灰の上を見つめてゐた——ふつと、先刻、俣の上から祈るやうなまなざしでこちらを見つめてゐた敏雄の、感じの深い青白い顔が浮んで來た。——と、何故ともなく目頭が熱くなつて、ほたりと涙が灰の上に落ちた。彼女はすぐに、涙の痕を火箸でかき消したが、涙はまたその後ろに落ちた。

「美津子さん、こちら？」

襖の外で雪子の聲がした。

美津子は、ふいと顔を擧げたが、その引き釣つたやうな口元にはまだかすかな微笑が残つてゐた。

三一

「雪子さん？ お入りなさいな」

美津子が少し狼狽した聲で、ゐすまいをなほしながら言ふと、

「一人で何してゐらつしやるの？」言ひながら、雪子は細目に襖を明けて入つて來たが、ちよつと美津子の眼を見ると、

「いけないわね。そんなに一人で考へごとなんかしてちやあ」

が、雪子の頼もしさうな堅肥りのからだを自分のすぐ近くに意識すると、美津子はまた不思議に、涙を催して來て、快よい涙が後から後からと湧いて來た。

「今になつて、そんなにくよくくしたつてしょうがないぢやないの」
しばらくして、雪子が落ち着いた聲で言つた。

「ほんとにね。つまらないわね」

美津子は濡れた眼で雪子を見擧げて、微笑したが、すぐ立ちかけて、

「お火を取つて來ませうね」

「おや、お火もなかつたのね。私が取つて來るわ」

「いえ、私が取つて來ますから」

美津子は手巾で眼を拭いて、臺所に立つて行つた。臺所では恰度、叔父と二三人の手傳ひが集まつて、香奠調べをして居るところだつた。

「あゝ、美津子さん、この齋藤としてあるのは、こりやあ本家のことでせうなあ」叔父は、叔父のよく知らない里方の親戚のことなどを問ひかけた。

「えゝ、多分さうでせうと思ひますけども」

美津子はよい加減に返事をして、火を取るとすぐ、逃げるやうに、奥に引き返して行つた。

「父たちは何うしてて？」

「もう奥でお休みのやうでしたわね」

「さう。父もすつかり年取つたのね。私今度歸つて來て見て驚いたのよ」

雪子は學校時代からひそかに喫ひ慣れて來た細い銀煙管を懐から取り出して旨さうに喫つた。

「ほんとに急にお年を召したのね。随分淋しがつてゐらしたわ。矢島はあんなだし、あなたも敏雄さんも急にゐらつしやらなくなつたし」

「でも、母とはこの頃あまり悪くはないらしいのね」

「えゝ。お母さん大分もうお家のことに慣れてゐらつしやいましたからね」

「うちもまあ、これからは少し好くなつて呉れなくちや。このまゝではかなはないわね」

「ほんとうですわ。……雪子さんも早くこちらに歸つてゐらつしやいな」

「えい、もう歸つて來ても好いんですけどね」

「歸つてゐらつしやいな。さうしたら、私もどんなに心丈夫だか知れませんか」
それは美津子の嘘でない氣持だつた。何事をも知つてゐて、何事をも許してゐるやうな、心の好い姉に對するやうな氣持を彼女は雪子に持ち續けて來たのだつたら。

「えい。それはね……」雪子は火鉢に目を落して、何かを考へてゐるやうだつたが——「でも、ことによると、私結婚するかも知れないのよ」

三三

「結婚？」

美津子は信じかねるやうに、雪子の顔を見つめたが、すぐこの頃の彼女の素振を

思ひ出した。

「では、もうお約束でもなすつたの？」

雪子はちよつと黙つてゐるが、やがて落ち着いた聲で言つた。

「そんなことぢやあないのですけどね、そんな風になるのぢやないかと思つて、さうしなきやあならない場合がありさうな氣がするのよ」

「やつぱりあの方……？」

「誰？」

「あの、何時かお手紙が來てた方」

「ううん、あれぢやないの」

雪子は煙草を一呼吸深く喫ひこんでから、それをもくくと口や鼻から出しながら言ひ續けた。

「まあ問題はあれなんですけどね。でも、私、あれとは結婚なんかしないわ」
「まだお若いんでせう？」

「ええ、まだ二十四で、學校を出たばかりなんですからね、ちよつと結婚するわけに行かないの」

「では、ほかにおありになるの結婚なさる方が」

「別にこれと云ふ話しぢやあないのでですけどね、たゞ、一つ、そんな話しが出てるには出てるのよ。向ふは三十七なんですけどね、後妻なの」

「後妻なの」

美津子は、雪子の心持を解しかねるやうに、彼女の眼に見入つた。

「ちよつとした官吏ですけどね、子供も二人ばかりあるし、あまり好い口ぢやないけれども、いつそ私、結婚してしまはうかなんて思つてるのよ」

雪子の多少棄鉢らしい口吻が彼女が或る危険な瀬戸ぎはに來てゐることを思はせた。

「その若い方とは駄目なの？」

「結婚？」

「ええ」

「それはね、今では向ふも結婚しても好いなんて言つてるのですけどね、私はもうその方は思ひ切るつもりなの、あまり若いから、向ふにも可愛さうだし、それに結婚したつて、結局、どちらにも不幸な結果になるにきまつてますからね」

「さあ、さうでせうか。私、そんなことはないと思ひますけどね。向ふに結婚する氣があるのなら、さうなすつた方が好いちやありませんか」

「さうねえ……」

雪子はまだ美津子に言へない何かに悩んでゐる様子だったが急に、この話を打ち切らうとするやうに淋しさうに、微笑して、

「でも、まだ何うなるか、ちつとも解らないのですけどね」

「それだつたら尙のことさうなさいましょ。繼兒のある後妻なんか、私考へるだけでも厭ですわ」

が、雪子は何とも答へなかつた。

三三三

美津子は今になつて愛しもしてゐない男のところへ嫁がうとする雪子の氣持を解しかねた。父親の手から夫の手へと品物のやうに授受された彼女、而もその十年間の結婚生活をたゞ眠つたやうに過して來た彼女に取つては、結婚生活は呪ふべきも

のではなかつたにしても、決して望ましいものではなかつた。それよりも、誰に束縛もされないで、自由に明るく都會に生きられる今の雪子の方が、どれだけ幸福だか知れない、それを雪子は今自分から見棄てやうとしてゐる……。

「さうですかねえ。私はまた雪子さんこそ、御自分一人で、思ひ存分に好い生活をなさる方だと思つてましたのに」

「さう見えて？ なか／＼さうは行かないのよ」

雪子は悩ましさうな眼をして美津子の顔を見てゐるが、

「それで、美津子さんはこれから何うなさるつもり？」

「私？」

「え、」

「何うつて、別に……」

「さうねえ、今からそんなことを決めて置くわけには行かないわね。でも、之からづつと此處の家にゐて下さるおつもり？」

「えい、それは置いて下されば此處にゐたうござんすわ、性が合はないと云ふのですか、私、里の父のところになんか一日もゐたくないのですもの」

「結婚は？ もうなさらない？」

「結婚なんか、私もう死んでも厭だわ」

「うちの兄でよつほど懲りちやつたのね」

雪子が笑ひなが言ふと、

「さう云ふわけぢやないんですけどね。私つくづくつまらないと思ふわ。ほんちに意味もなく家庭に縛りつけられてるんですものね」

美津子は急きこんだ調子で答へた。その語氣の烈しさに、雪子は目を見張つた。

「美津子さんも變つたわね」

「さうでせうか……？」

「それで、兄のことを、今はどんな風に思つてゐらして？」

「どんな風につて、別に……」

しばらく黙つてゐるが、やがて言ひ續けた。

「初めのうちは、私たゞ怖かつたわ。ほんとに怖い方だと思つてましたわ。それが、あゝしたことになつて、歸つてゐらしてからは、何だか氣の毒で堪まらなくなつたのですけれどね、でも、やつぱり怖い方だつたと思ふわ」

「ぢやあ、今でもやつぱり怖いのね」

「えい、思ひ出すとやつぱり怖いわ。なつかしいなんて思つたこと一度だつてないのですもの」

さういつて美津子は淋しさうに微笑した。

「そんなものですかねえ。それでは無理はないけれども、でも、随分先が長いわねえ」

雪子も引き入れられるやうに言つて、憐むやうな目ざしで、しばらくぢつと彼女に見入つた。

美津子も何となく目を伏せねばならなかつた。

三四

「先が長い……」

その夜が更けてから、美津子はその言葉や、雪子のあの憐愍に満ちた目ざしを思ひ起した。そしてそれが、まつすぐ彼女の胸に落ちて、殆んど狂氣のやうな焦燥を

呼び起した。實際、彼女の前には、えたいの知れない茫漠とした、灰色の道が横はつてゐた。そこに彼女が會つて味はつて來たやうな苦勞や束縛を豫想することは出来なかつたが、同時に其處には張り合ひがなく色彩がなかつた。その定まりのない長さの感じには、彼女は堪へられなかつた。退屈の豫想が退屈そのものよりも強く彼女の心を焦^いたした。彼女は何かを掴まねばならなかつた。掴みどころのない孤獨に誰が堪へ得るだらう！

一度床から起き上つて、櫥子の小窓を開けて、水車の遠音を聞きながら、しばらく、痛いほど寒い夜氣に耳を弄らせてゐた美津子は、今度は電燈を點けたまゝで横になつて見たが、それでもたゞ神經が昂ぶるばかりだつた。そばには雪子が、健康さうな躰を軽く立てゝゐた。

……彼女も行かうとしてゐる、彼女こそは、自分の道づれになるべく、自分を待

つてゐる呉れる筈だつたのに。——雪子は思ふともなくさう思つた。

彼女はしばらく雪子の寝顔を眺めてゐる間に、誰からも見捨てられた——むしろ人生そのものから見捨てられたやうな自分が、一層はつきりと頭に描き出された。而もさうした孤獨の底から、こみ上げるやうな微笑と共に頭に上つて来るのは、亡くなつた夫ではなくて、まだ子供のやうにも思へる敏雄の姿だつた。

美津子はたうとう起き上つた。手早く着物を着かへると、そつと次ぎの間から書簡紙を取つて来て、それを机の上に擴けた。何を書かうと云ふ當てはなかつたが、何かしら書きたいことが無數にたまつて居る氣がした。

しばらく桃色の書簡紙を見つめてゐた末に、やがてペンを取つて見たが、さて書かうとすると、書かねばならないことは何一つなかつた。が、兎に角書いた。しかしさうして書いて見ると、一つ一つの言葉が、他人の言葉のやうにそらくしい身に

しまないものに思へた。彼女は幾度も書いては裂き、書いては裂きした。そして、それから三時間の後、夜が漸く明けやうとする頃に書き上げたのは、辛と書簡紙一枚にも足りないほどの短いものだつた。

「敏雄様——」

さつき御送りしたばかりの今お手紙などを書く私を御笑ひ下さいますな。それほどに私は今苦しんで居ります。何に苦しんで居るのか、自分にもはつきり判りませんが、たうとう今夜は眠れませんでした。今でも私の先生のやうに思つてゐる雪子さんや、あなたのゐらつしやらない道は淋しふございます。自分がこれほど慘めにならうとは、今日が今日まで夢にも思はなかつたのですけれども……。

好い成績を取つて、一日も早く歸つて来て下さいまし。慘めな私を慰めて下さいまし。——お兄さまの遺言どほりに。今はたゞそればかりを待つてゐます」

書き終ると、それを引き裂かうとする自分の手を恐れるやうに、読みかへしても見ないで封筒に収めて、ほど近いポストに入れるために、まだ仄暗い往來に走り出した。

三五

翌日から、美津子はたゞいらくして、敏雄から手紙が来るのを待った。それは處女の戀ごころに似てゐた。實際、硬い眠りの中にその處女時代を見棄て、來た彼女は、今になつて十年前に醒めたやうなものだつた。而もその醒めは一夜にして來た。無論それまでとても、殊に近頃になつては、敏雄に對する或る親しみの感情は持つてゐた、しかしそれは、自分の同情者に對する單純な信頼や歡び以上の心持ではなかつた。だから彼女のあの狡さうな忍びやかな目つきや、それとない吐息に、敏

雄が或る特殊な意味を讀んだと思つたのは、むしろ彼の思ひ過ぎだつた。彼女自身も氣附いてゐない、醒めの豫兆としての媚態コケツトリキに對する、敏雄自身の思ひ過ぎにすぎなかつた。敏雄の存在が美津子の心に、動かせない形を取つたのは、彼女が雪子と語り更かした夜の、孤獨のどん底に於て、あつた。それはたゞ一夜の出來事ではあつたが、日と共に伸びた。恰度、若芽の地上に芽ぐむのが、たゞ一夜の出來事であるやうに。……そして、種子の土中に埋れてゐる期間が長ければ長いほど、芽ぐんで後の成長が早いやうに。……

初七日が濟むと、雪子は東京に歸つて行つた。流石に父親はしばらく雪子を引き留めて置きたいらしかつたが、雪子には、それに耳を借す餘裕もなさうだつた。

一度、雪子が、それとなく結婚の話しを父親を持ち出したことがあつた。が、父親は、何れにも確な返事はしなかつた。

「そりやあまあ、女の道ぢやから、一度は結婚するも好えぢやらうが、それがまた考へものぢやて、八卦みたいなもんで、當るか當らんか解らんものだでな。まあしかし、好え對手があつて、行つて見たい氣にでもなつたら、行つて見るのも好えぢやらう。なあに、行つて見たところで、是が非でも死ぬまで向ふに居らなきやならんと言ふ法もないのぢやから、氣に入らなんだら歸つて來るまでのことぢやよ。家がどれほど貧乏をしても、まさかお前一人の食ひ扶持に困ることあなさうぢやからの」

父親は例によつて、取りとめのないほど寛大で無關心な口を利いたが、内心雪子をこの家に引き留めたく思つてゐることは、彼の口吻から隠せなかつた。一度嫁入りはさせても、何かの機會に自分の手許に引取らう。——それを、もう長い前から決めて置いた肚のやうに、ごく無雜作に言つてのけるのだつた。

雪子が發つ三日ばかり前に、美津子は、敏雄からの返事を受け取つた。一度長い手紙を書いたが、たうとう引き裂いてしまつたと云ふことを冒頭にして、試験が全然うまく行かないこと、駄目に決つてゐる試験のために身を切られるやうに後四日を過さねばならないことの辛さなどが、簡単に書いてあつた。

美津子は奥の間の櫃子のところに立つて、二度ばかり繰返して讀んだが、讀んで帶の間に挟んで置いて、夜、床の中でまた開いた。

度々讀むに従つてそれは物足りなくなつた。しかしその物足りなさは、間もなく敏雄が歸つて來ると云ふ楽しい期待で打消された。

彼女はたゞ、敏雄の歸るのを待つた。

敏雄の歸つて來た日は、朝から春らしくどんよりと曇つてゐた。その日は恰度、美津子の老母が里に歸ることになつてゐたので、早い晝めしを濟ませると美津子は、村ざかひの峠まで老母を見送つて行かねばならなかつた。

「それでもなんぢやのう、一ぺん近いうちに、家へも歸つて見るが好えのう。矢島にも早や、お前の手が要るやうなこともないぢやらうけにのう」

老母は、俵の上で小さく肩を揺すられながら、そばについて歩いて居る美津子に言ひかけた。

「そりあ一度歸つて見たうはござんすけどね。矢島の家も、あれでなか／＼手がかゝるんですよ。雪子さんはゐらつしやらないし、お母さんは何もなさらない方だし」

「そりやまあさうぢやらうが、何も長いこと、は言はん。父つアんもはや好え年

ぢやけに、一日でも二日でも顔を見といて上げるが好えと思ふんぢやがの」

「さうですね。では、そのうち一度歸つて見ませうかね」

美津子はさう言つて、俵の上の淋しさうな老母の姿を見上げたが、何故ともなく、涙が目一ぱいに溢れて來た。

「これが最後だ」——漠然と、さうした感情が頭の中を過ぎた。それは老母の死を考へたからではなかつた。たゞ彼女は、自分自身を、果しなくさ迷ひ歩かうとする旅人のやうに感じたのだつた。

一里近くの道を歩いて、彼等が峠の頂まで來た時には、何時か、雨を含んだ風が、灰のやうな砂を吹き捲くつて、兩がはの小笹に烈しい音を立てゝゐた。

「ぢやあ、お母さん私、こゝで歸りますから」

美津子は立ちどまつて、吹き亂れた束髪に兩手を當てながら言つた。

「おう、そりやあ御苦勞ぢやつたの」
老母も、まともに吹きつける風を避けるやうにして言つた。

「ぢやあお氣をつけなすつて。お父さんによろしく」
俣はそのまゝ、向ひ風の峠を下つて行つた。

美津子はしばらくそれを見送つてゐたが、俣が或る岩鼻の蔭にかくれると、急に、思ひ出したやうに、もとの道に引きかへして行つた。

峠を降りても、風はますます吹き募つて来るばかりだつた。街路のところ／＼にばつと白い土煙が立つと、それがもく／＼と錐のやうに卷上つて、やがてばら／＼と黒つほい水田の上に落ちた。

ほつり／＼と雨がまじつて來た。美津子は、股のあたりまで捲し上りさうになる裾を右手で壓へて、やがて、小走りに走り始めたが、それと殆んど同時に痛いほどの

雨が、彼女の背を叩き始めた。すぐに、ぐつちよりと、彼女の全身が濡れた。が、彼女は走り續けた。もう歸り着いてゐる筈の敏雄の名を口づさみながら走り續けた。走りながら、彼女は、生れて初めての或る悲愴な亢奮を感じてゐた。

しかし、すつり濡れて、疲れて、彼女が家に歸つた時には見覚えのある敏雄の帽子が、事もなげに、玄關の帽子架にかゝつてゐた。

三七

夕食後、父親たちが居間に退いたあとで、裏山に臨んだ四疊半に、美津子と敏雄とは坐つてゐた。そこは曾て健造が病中には、病室に近いために看護人の控へ間に用ゐられたものだつた。夏になると、山から吹きおろす風と田から吹き寄せる風とでまるで氷室のやうに涼しいために、家ぢゆうの者が先を争ふほど重寶な晝寝の場

所にされるのだつたが、冬になると、明かすの間ほどに取扱はれてゐる部屋だつた。二人きりになつて見ると、どちらも急に話しが出なかつた。期待が大きかつただけに、何となく調子が失はれてゐる形だつた。が、それでも、敏雄の試験の話が済むと、彼等の氣拙さを救ふものゝやうに、雪子の結婚の噂が、美津子から話された。それは敏雄には思ひもよらない話しだつた。

「それは姉さんが自分で話したのですね」

「えい。こないだ二人きりで、随分おそくまで話合つたのよ」

「そりや驚いたなあ。僕はまた姉さんは一生一人である人のやうに思つてた」

「私もさう思つたのですがね。だしぶ苦んでゐらつしやるやうだつたわね」

「何か戀でもしてゐるのですか？」

「えい。はつきりとは解らないのですけどね、何うもさうらしかつたわ」

「さうかなあ、あの姉がね……」

敏雄はさう言つて、ふつと黙りこんだ。母のない後を、自分の子のやうに庇つても呉れ、愛しても呉れた姉のことだけに、彼は淋しかつた。

「でも、何うせらつしやるのなら今のうちだわね。今ならまだおそくはないけれど……」

美津子は火鉢の火を掻き上げながら言つた。

外には、嵐のやうな雨が、小止みなく降り續いてゐた。

ザ、ザ、ザ……

吹き捲られて行き場に困つた雨が、時々、痛々しげに雨戸に叩きつけられると、その音を掻き消さうとでもするやうに、間近い山の樹々が、風に焦つて唸つた。山から流れ落ちる水が、裏庭に瀧のやうな音を立てるのが物凄くひどかつた。

「まあ、よく降るわね。かうしていると凄いやうだわね」

美津子はさう言つて、敏雄の顔を覗くやうにしたが、敏雄が袂から煙草を取り出すのを見ると、

「まあ煙草を喫ふのね。何時から？」と言つた。

「何時からつて、もうこないだから。知らなかつたの？」

「ちつとも知らなかつたわ。ぢやあ、こないだは隠してゐらつしやつたのね」

「えい、一寸きまりが悪かつたから」

「まあ……」

美津子は軽く叫ぶやうに言つて、あでやかに笑つたが、すぐ敏雄の手の煙草を取つて、

「私が火をつけて上げませうね」

言ひながら、不器用に煙草を啣へた口を、赤く熾つた火の上に持つて行つた。

敏雄は、何となく齒軋りでもしたいやうな氣持で、火に照つた彼女の横顔を見つめてゐた。

三八

「ね、二人でかうしてゐると、何かのやうだわね」

美津子は、少しばかり口に入れた煙を、悪戯らしく、すほめた口から細い糸のやうに吐き出すと急に眼を輝かして言つた。

「何かのやうつて……」

敏雄はたゞ反射的にさう呟いたが、遽に眼の前に霧のやうなものが立ちこめた氣がして、自分ながら何を言つてるのか解らなかつた。

「さうぢやない？……姉弟？……それ以上だわね」

さう言つた時には、美津子は、火鉢の上に差し出した敏雄の右の手を、彼女の華奢な白い二つの掌の間にそつと挟んでゐた。

敏雄は、彼女の潤んだやうに光つてゐる眼を見た。それから、左手に持つた煙草をゆつくり灰の中に差し入れると、そのまゝその手を、美津子の手の上に置いた。美津子はそれをも彼女の掌の中に収めた。

「冷たいわね」

「ちやう……？」

そのまゝ、二人はしばらく黙つてゐた。それ以上なにも言へなかつた。言ふべきことがなかつた。

雨のために、時々電燈が蔭つた。可なり長い間、暈光のない赤い線だけが残つて

渣のやうな隈を畳の上に落してゐた。

「暗いわね」

しばらくして、美津子は顔を舉げて、電燈を眺めたが、手は確かりと握りしめてゐた。

「消えるのぢやないでせうか」

「さあ、消えるかも知れませんね」

が、灯はまたまた次第に明るくなつて來た。

「あゝ、明るくなつて來た」

美津子は子供のやうな笑ひを浮べて敏雄の顔を見たが、すぐに、

「でも嬉しいわ。たうとう會へたんですもの。どんなに待つてたか知れないのよ」
「僕も早く歸りたかつた」敏雄はもう眼を一ぱい涙にして言つた。「こんなに辛い

試験つてなかつた」

「でも、わたし今日雨に打たれながら走つてる時は好い氣持だつたわ。こんなにして敏雄さんに會ひに行くのだ——さう思ふとね、雨に叩かれてるのが堪らなく好い氣持なの」

「僕はまた、嫂さんがぐつちより濡れて飛び込んで來たので、何うしたのかと思つて驚いちやつた」

「さう？ 驚いて？ それだけでも好い氣持だわ」

彼女は快よささうに笑ひ出したが、また眞顔に返つて、

「でも、これからは好いわね。仲よくしませうね、何でも用事があつたら言つて頂戴。これまでの雪子さんのやうに、これからみんな私がして上げますからね」

「え、何うぞ」

惜しいわね！ ね！

欠

欠

て、彼の肩にかけてやつたりした。

「あゝ、好い。よくうつるわね」

そんな風に言つて、彼女は満足さうに敏雄の姿を眺めた。

一度敏雄が、毎年定つて春先きに引く軽微な風邪を引いた時などには、彼女は可笑しいほど大袈裟な介抱をして、彼のそばを離れなかつた。

「駄目、駄目、もつと寝てゐなくちやあ」

もう熱が引いた後にも、彼女は無理に二三日も床から離れさせなかつた。その三日目に、敏雄がそつと起き上つて、庭傳ひに裏庭の方へ出て行くと、恰度其處で洗濯をしてゐた美津子はそれを見るとほんとうに怒り出した。

「何故起きてゐらつしやるの？ またぶり返して兄さんのやうにでもなつたら何うなさるの？」

「もう大丈夫。熱なんかないのだから」

「熱がなくなつたつて、この寒いのに……」彼女は何か怖いものでも見るやうに、春には寒い曇つた空を見廻したが「私も、ほんとに病氣は厭よ」と言つて押すやうにして、敏雄を家の中に入れた。

彼女は、見違へるほど快活によく働いた。父親の世話のほかには何一つ家のことをしない母親に代つて、彼女が、家ぢゆう萬端を手ぎわよく片づけて行つた。それは曾て健造が生きてゐた頃に、お嬢さん育ちと言はれるほどおつとりしたのを見てる者の眼には不思議なほどの相違だつた。

「まあ、さう働いてばかりゐないで少しは休めよ」

彼女が、女學生か何かのやうなエブロン姿で、急がしさうに庭さを掃いてゐるのを見ると、父親も煙草盆などを持ち出して来て、縁がわから聲をかけた。

「はい。有難う、でも、かうして働いてると、ほんとに好い氣持なのですよ」

美津子は、近頃めきくと肥つて來た腰のあたりを氣にするやうにして、ちよつと縁がわに腰をかけたが、すぐにまた働き始めるのだつた。

その、小柄なりに、若々しく肥つて來たからだを、父親は珍らしさうに眺めてゐた。昔の何處となく陰鬱な影は今の彼女には、殆んど跡を止めてゐなかつた。

四〇

これからそろそろ、村の若者たちの夜遊びでも始まりさうな春も盛りの蒸つぽい月夜だつた。敏雄と美津子とは、どちらかと云へばむしろ美津子の郷里に近い或る山間の、小さい温泉宿の二階で會つてゐた。久しぶりに二三日郷里に歸つて來ることになつた美津子が、夜更けてから郷家に着く豫定で、それまでの短い宵を、もう

別れに近い敏雄と一緒に過さうと云ふのが三四日前からの話しだつたのだ。

打ち合せて置いた通りに、美津子が其處に着いたのは、宵にはまだ間のある頃だつた。

「お連れさまがゐらつしやいました」

間もなく女中がさう言つて來ると、すぐ敏雄の姿が、廊下のところに現れた。

「ゐらつしやい」

美津子は氣輕にさう言つて、すぐそばに敏雄の席を作つたが、敏雄は迷惑さうにむつつりして黙つて立つてゐた。

「お風呂の用意を致しますから何うぞ御ゆつくり……」

女中が降りて行くと、敏雄は漸く部屋に入つて、

「随分待つたでせう？」

「いいえ、そんなでもないのよ。でも、小一時間は待つたかも知れないわね」

「さう。嫂さんが發つてから、僕もすぐ出ただけども、恰度俵がなくなつて」

「さう？　でも、私が來る時には、まだ一臺あつたやうだつたわ」

「うゝん、小一郎の家のぢやないの。あそこから乗つては解ると思つたから、す

つと役場の方へ廻つて、あそこで辛と一臺見つけて……」

「さう、そりや大變だつたわね。久しぶりに通ると随分長い道ね」

「前にも來たことがあるのでせう？」

「此處へ？　えい、まだ十一二の時分、一度、父に連れられて來たことがあつたわね」

「兄さんとは？」

美津子は閃と敏雄の顔を見たが、それには答へないで、すぐ言ひ續けた。

「でも、あの頃から見ると此處も變つたやうだわね、あの頃はお座敷なんか随分暗い陰氣なところのやうな氣がしてただけども」

「それは、此處の家が變つたよりも、嫂さん自身の心持が變つてるんでせう」

「さうね、さうかも知れないわね、ほんとにあの頃は何故あんなに陰氣な子供だったのでせうね」

さう言つて美津子は、しばらく珍らしさうに、黒く煤けた天井などを見廻して居たが、「でも、好い景氣だわね」と言ひながら、廊下の方へ出て行つた。敏雄もすぐ、彼女のあとについて、廊下に出た。其處からは、深い崖下に、浅い溪流をへだて、すぐ目の前に若葉に薄く色づいた峻しい山が見渡された。二人は何時か手を握つて、しばらく黙つて立つてゐた。

と、先刻の女中が、浴衣を持つて上つて來た。

「お待ち遠さまでした。すぐお湯にゐらしつて」

四一

「敏さん、何う？ 御湯に行つていらしたら」

「え、しかし嫂さんは？」

「私もあとで行くわ」

「さう、ぢやあ、行つて來やうかな」

女中は怪訝さうに二人を見てゐたが、すぐ敏雄と一緒に階下に降りて行つた。

敏雄が上つて來ると、美津子が入れ代つて湯殿に降りて行つた。が、かうして一人取り残されると、敏雄は不思議に心持が滅入つて來るばかりだつた。が、がらんとした親しみのない部屋が、妙に彼の心を壓迫した。小さい粗末な金火鉢の上にぶつく

と沸つて居るお湯を自分で急須に注ぎながら、敏雄は今宵のこれからの自分たちを、心に描き樂まうとした。が、今日に限つて何故ともなく、何時もの胸を躍らせるやうな期待の喜びは浮んで來なかつた。彼はいら／＼して美津子の來るのを待つた。事實、美津子はなかく／＼上つて來なかつた。

「あゝ、好い氣持」

さう言ひながら、美津子がほつと上氣したやうな顔を見せたのは、それからしばらくしてからだつた。

「湯殿はきたないけども、お湯は割に好いお湯だわね」

そんなことを言つて、美津子はすぐ床の間の小さい鏡臺の前に座つて、丹念に化粧を始めた。敏雄は黙つて、しばらく、その白い首筋のあたりを眺めてゐたが、その強さうな線の感じさへが妙に彼の心を陰鬱にした。

「でも、大膽になつたものだわね」

ふつと美津子が、思ひ出したやうに、鏡臺を見つめながら言つた。

「え、何が？」

敏雄は訊き返さなければならなかつた。

「いえ、ね、私たちが大膽になつたつて言ふの、こないだまでは、とてもこんなこと出來なかつたわね」

美津子は笑ひながら言つて、鏡臺の前から立ち上つたが、すぐ、わざとらしいほど近く敏雄のそばに坐つて、

「でも、仕方がないわね。かうなつてしまつたんですもの」

さう言つて軽く吐息をついた敏雄はやはり黙つてゐた。

間もなく女中が、膳を運んで來た。

「まだ少しお早いやうですけども……」

「いえ、好いのですよ。ゆつくりいたゞきますから」

運んで来た料理を茶ぶ臺に並べて、女中が出て行くと、美津子は急に笑ひかけて、
「敏さん、お酒飲まない」と言つた。

「嫂さん飲むの？」

「え、一寸飲んで見たいわね、敏さんは？」

「さう、少しなら飲んでも好い」

「飲めるんでせう？ 兄さんの弟ですものね」

言ひながら、美津子は女中を追つて、廊下を走つて行つた。

敏雄は妙に元氣づいた彼女の後姿を妬ましいやうな心持で見送つた。

四二

「あ、あの音、あの音」

三度、女中の上つて来る足音を聞くと、美津子は顔を廊下の方へ向けて言つた。

「何うもお待ち遠さまでした」

言つて入つて来ると、女中はお銚子と盃洗とを茶ぶ臺に置いて、すぐ出て行つた。

「なに？ あの音つて」

敏雄がすぐ聞いた。

「いいえ、ね、あの盃洗の中で盃と盃とがちりんくとかち合ふ音が近づいて来るのが、お酒飲みには堪らなく好いのですつてね」

敏雄は「何んだ」と云ふやうな顔をして黙つてゐたが、美津子には、さうした些細

なことまでが嬉しくて堪らないらしかった。それが、敏雄の心に幽な不快を呼び起こした。

「兄さんがさう言つてた？」

すなほな氣持で言つたつもりだったが、その聲に、敏雄自身が驚いたほど、重い硬い響きがあつた。

美津子はちらと敏雄の顔を見たが、すぐに手際よく水を切つて、盃を差し出した。「何う？」

敏雄の盃に酒を注ぐと、今度は、自分の前に盃を置いて七分目に注いだ。敏雄は、その器用な慣れた手つきを凝と見てゐたが、ふと思ひがけなく、曾て一度も感じなかつた妬ましさ、暗い澁面を作らせて、彼の頭を過ぎた。其處に、健造の捺印スタンプが、儼として残つて居る！

「私、飲むわ」

敏雄が盃に手をつけないのを見ると、美津子はそれを促すやうに、両手で自分の盃を取つた。

「何うぞ。たんと召し上つて下さい」

敏雄も、自分で自分の機嫌でも取らうとするやうに、冗談らしく言つて、一気に盃を飲み干した。

「やつぱり好いお手際ね」

二三杯飲んでるうちに、美津子は好い顔色になつた。そしてすつかり幸福になつてゐた。が、彼女のさうした機嫌が、何故だか、敏雄に悪く働きかけて來た。珍らしく、六七杯も續けざまに飲んでみたが、妙にしらぐしく冴えて來るばかりで、少しも酔へなかつた。美津子が浮はついて來れば來るほど、彼の心は不快に沈んで

行つた。

「弄ばれてる！」

そんな氣持が彼の弱い心を咬んだ。

その不快な氣持で、彼は二三日前のことを思ひ出してゐた。――

例によつて、日が暮れてから、二人で庭で會つてゐる時だつた。長い、しびれるやうな抱擁や、夕立のやうな口つけで、すっかり疲れてしまつた時、敏雄が二人で結婚しようと言ひ出したことがあつた。

「まあ……」敏雄のその思ひ着きを心から驚いたやうに叫んだ美津子は、やがて考へ考へ言つた。「でも、駄目よ。とてもうまくは行かないわ」

「ぢやあ、僕等は何うするの？」

「何うするつて……このまゝで好いちやないの……。でも、何時までもね。何時

までもね」

美津子の狂暴な接吻で、その話しはたゞそれだけで済んだのだつた。

四三

敏雄には、美津子が何故結婚を拒むか、解らなかつた。それはごく突差に、情熱の發作の中に生れた申し出で、はあつたが、敏雄としては、可なりに勇敢な、相當に犠牲的な決心であつた。――と、敏雄自身は思つてゐた。此の場合、嫂と結婚することが、近親や郷黨の人々に何う見られるかと云ふことに就て、彼は無智ではなかつた。其處には相當な迫害もあるべきであつた。が、それらのことを思ふことが、寧ろ彼のこの決心に或る色どりを與へた。彼はさうした犠牲的な行爲を取ることによつて、自分の徳行を信じやうとし、自分と嫂との交渉に或る正ヂヤステイフイケインヨン義を認めやうとした。

だから、美津子がこれを拒んだ時、彼はそのことに或る喜び——何かに放たれたと云ふ喜びをも感じたが、同時に、或る不快を抱かすにゐられなかつた。彼は美津子に、或る道徳的な非難を感じると共に彼女の愛に或る疑ひを抱かすにゐられなかつた。

「何うしたの？ そんなに沈んでしまつて」

考へこんでゐる敏雄を促すやうに、美津子は、銚子を取り上げて言つた。

「何うもしないけども、何だか——」

「何だか——何うしたのよ」

美津子は、可なり酔つた膝を彼の方へにじり寄せて言つた。

「何だか——悪いことでもしてるやうで……」

敏雄はたゞさう答へるより仕方がなかつた。と、美津子も、その心持に感じたや

うに、目を伏せて。

「さうねえ。悪いかも知れないわね。たしかに、悪いわね」とゆつくり言つたが、急に目を舉げて、

「でも、仕方がないぢやないの」と、言ひ續けた。「かうしか仕方がないぢやないの？ え？ 何うしたら好いの？ 別れるの？ え？ 別れられて？ 私たちのこの情熱を何處へ持つて行つたら好いの？」

言ひながら、美津子は何時の間にか、目に一ぱい涙を溜めてゐた。敏雄は、彼女の此の思ひがけない雄辯にすつかり壓倒されて、たゞ黙つてゐた。

「ね、好いでせう？ このままで」

「え、好いです、好いです」

敏雄も何時か、彼女のこの情熱の中に巻きこまれてゐた。

何時の間にか月が上つたらしく、電燈の光りのとまかない次ぎの間の障子が、七分ばかり、白く寒さうに照し出されてゐた。ほかに客のないこの宿では、すぐ近くの溪流の音さへ、捨てられたやうに侘しかつた。敏雄はじつとその音に耳をすましてゐたが、美津子が涙を拭かうとさへもしないで、凝と盃の上を見めてゐるのを見ると、

「注ぎませう、一杯」

銚子を取り上げて言つた。

「え、有難う」

美津子はなみ／＼と注がせたが、唇にはつけないで、すぐ下に置いた。

四四

夜が可なり更けてから、二人は廊下に立つてゐた。もう満月に近い月光が煙るやうに、若葉の梢を渡つて、ほの／＼と白み渡つた溪流に落ちてゐた。弱い水音が、秋の蟲のやうに、ちろ／＼と聞えて来るほかには、物音一つ聞えなかつた。

「静かだわね」

美津子は、把つてゐた手をそつと放して、欄干に倚りかゝるやうにして言つた。

「ほんとに静かですね。しばらくこんな處にゐたいなあ」

「ゐらしたら好いぢやないの。さうしたら、私歸りにまた寄るわ」

「さう。二三日此處で遊んで行つても好いなあ」

「さうなさいましょ。私明日は歸つて来るわ」

「ぢや、さうませう。しかし、嫂さんはもう出かけなくちやならないでせう」

「え、もう出かけるわ」

さう言つて、美津子はまた彼の手を把つたが、しばらくそのまゝ、ちらくちらくと楢に動く月光を見つめてゐた。

「何を考へてるの？」

敏雄が詰るやうに問ふた。何故とも知れない不安が、冷く月光に澄んで居る彼女の横顔から、彼の心に落ちて來たのだつた。

「何故？」

それを見抜いたやうに、彼女がすぐ反問した。

「何を考へてるの！ 兄さんのこと？」

それは敏雄自身も豫期しない言葉だつた。

「まあ！」彼女は、敏雄のその考へに駭いたやうにしばらくづつと敏雄の顔を見つめてゐたが、

「何うして？ 敏雄さんは妬けてるのね」

「妬けてなんかるないけども、たゞ一寸さうかと思つて」

「厭！ そんなに誤麻化したりして」

美津子は、姉らしい柔しさでそつと両手で、敏雄の肩を抱くやうにしたが、やがて靜かな聲で言ひ續けた。

「でも、つまらないわね。何時までかうしてゐられるか解らないのですものね。

そのうちに敏雄さんに奥さんでも出來れば、私なんかもう要らないものですわね」

「うゝん、一生……」

烈しい情熱の發作が過ぎると美津子はまた落ち着いた聲で言つた。

「さうだと好いけども、なか／＼さうは行かないわよ」

「だから、結婚しようと言つてるんぢやないか」

敏雄は多少手の力をゆるめて言った。

「ほんとにさう思つてゐらつしやるの？」

「無論。そのほかには行く道がないのだもの」

「有難う。ぢやあ、さうして下さる？」

美津子は泣きながら言った。その湯のやうな涙が、敏雄の手を濡らした。

その夜美津子は、たうとう發たなかつた。

昏には珍らしく澄み渡つた月光が、夜通し、この山間の小舎を照してゐた。

四五

それからの三日ばかりを、二人はこの宿で過ごした。その間に、美津子は一度里の方へ歸つて行つたが、すぐその晩にはこの宿に引き返して來てゐた。美津子は、

父親たちに疑はれることを多少考へないではなかつたが、しかし、かうよりほかには何うすることも出来なかつた。彼女は自暴氣味に、運命の顔を伺つてゐた。而も敏雄には、彼女が家のことを考へるのさへもが不快に思へた。彼の心はそれほどに切迫してゐた。

四日目に、彼等は前後して家に歸り着いたが、敏雄は、その日のうちに、再び九州の學校に歸つて行つた。

が、それから十日ばかり経つた頃だつた。突然、美津子が變死したと云ふ郷里からの電報が東京にゐる雪子を驚かせた。その頃雪子は、彼女の絶望的な結婚にすっかり心を決めてしまつて、殆んど狂氣のやうな愛慾で彼女の若い戀人との別れを惜んでゐたのだつたが、この報知は彼女をすつかり昏迷させた。彼女はすぐ、先日健造のためにしたばかりの旅を、再び美津子のために、郷里に向つて歸つて行つた。

雪子が歸り着いた時には、美津子はもう骨になつてゐた。健造の時とは打つて變つて、ひつそりと静まり返つた家の中には、美津子の父親と雪子たちの父親とが、暗い顔をしよんほりと突き合せてゐた。そしてその奥の一間には、同じやうな電報で、九州から歸つて來たばかりの敏雄が、死人のやうに青ざめて、一人横になつてゐた。雪子は口が利けなかつた。

美事に切斷された美津子の死體が、此處から數十里も離れた或る西の方の、小驛に、近い線路の上で發見されたのは、彼女が家出した翌々日の夜だつた。驛員の一人は、その日の朝、このあたりには見慣れない揃ひの大島を重ねた、小柄な彼女が、手荷物一つ持たないで、二等車から降りたのを見たと言つたが、その前日に、同じやうな姿の彼女が、彼女の郷里に近い或る海岸に、しよんほりと立つてゐるのを見たと言ふものもあつた。何れにしても、家出した後の彼女が、一つ處にゐたのではないことは事實らしかつた。

自殺か他殺か——それも一寸問題になつた。人々は、彼女の死因を確めやうとして家捜しをしたが、遺書らしいものは何處にも見つからなかつた。しかし彼女の死が、家出前からの覺悟ではないにしても、兎に角、覺悟の上の自殺であつたことは、下駄やオペラバックをちやんと揃へて置いてある現場から察して、誰にも疑へなかつた。

しかし、何故彼女は自殺したのか？——人々はそれに就て、さまざまに噂し合つた。しかし結局、誰にも解らなかつた。それは敏雄自身にもはつきりとは解らないらしかつた。中には彼女の死がほゞ健造の命日に近いことから、それを一種の殉死のやうに考へて、彼女の貞節を稱しようとした人たちもあつたが、眞面目には誰もさう信じて居るのではなかつた。

たゞ雪子だけは、彼女の死因らしいものを掴んだ気がしてゐた。

四六

或る晩雪子は、美津子の箆笥を開いて、彼女の遺物を漁つてゐたが、偶然、折重なつた着物の中から、敏雄から彼女にあてた十通ばかりの文殻を引っぱり出した。彼女は一寸躊躇した。そのまゝ敏雄に渡さうかとも思つたが、何となく素直にさう出来ない氣持も働いてゐた。彼女は讀むともなくそれを讀み始めたが、やがて或る一通に讀み到つて、彼女は、たと何かにぶつかつた氣がした。

日附から見ても、それは彼女の家出の五日ばかり前のもので、この文殻の最後のものだつたが、其處に敏雄は、彼女から受けた或る病氣を訴へてゐた。

「何と云ふことだ。僕は今、暗黒のどん底にゐる……」

そんな風な書き出しだつた。彼がその時、亢奮の頂上にゐたことは、その亂雑な文字からでも察しられた。

「……昨日の朝、初めてそれを知つた時、全人生が僕には暗闇だつた。ほんとに何と云ふことだ。たうとう昨日一日、僕は嫂さんに對する非難の思ひで震へてゐた。心から憎いと思つた。しかし、一夜の眠りが僕を救つて呉れた。今日の僕は、もう嫂さんを非難しやうとは思はない。凡ては止むを得なかつたのだ。嫂さんが、淫蕩な僕の兄の妻であつた限り、それは止むを得なかつたのだ。そして、僕と嫂さんがかうならねばならなかつたことも、それも止むを得なかつたのだ。しかし、兄の遺跡が——穢辱の遺跡が、此處にまで——姉さんの肉體にまで残つて居らうとは！僕は今、泣き叫ぶ。僕の心は地團駄を踏んでゐる」

「……姉さん、これが兄の僕に對する復讐だらうか？　僕は昨夜、このことに思

ひついた時、床の中で、本統に震へ上つた。僕は兄を苦しめてるのだらうか？　これほどに深い愛でさへ、あなたが嫂であるために、義とせられることが出来ないのだらうか？」

「僕は、姉さんを幸福にするためには、どんな犠牲でも忍ぶ気で居た。父たちの反対は無論のこと、世の人の不義呼はりでも何でも、あらゆる侮辱に堪へる氣でゐた。無論今でも、そんなことを恐れる僕ではない。しかし、この思ひに何うして堪へられやう。死者を苦しめると云ふ思ひに、何うして堪へられやう。しかし兄は、姉さんの幸福を望んではゐないのだらうか？」

「……今日の僕は、運命を呪ひ抜いてゐる……」
これらの文字を、雪子は飛び飛びに讀んだ。實際、彼女の心も、凝としてはゐられないほどにわな、いてゐた。

雪子は、この手紙を讀んで家にゐられなかつた美津子、二日間をさ迷ひ續けた美津子の姿を描いて泣いた。

彼女の心の一番近くにゐる美津子のために泣いた。

大正十一年九月十五日印刷
大正十一年九月二十日發行

月光曲

定價金五拾錢

著 者 田 中 純

發 行 者 福 岡 益 雄

印 刷 者 谷 口 熊 之 助

印 刷 所 金 星 堂 印 刷 部

發 行 所 東京市神田區表神保町十 金 星 堂

電話神田 三八五三番
四八三一番
振替口座東京三三二八番

金星堂

名作叢書

▼森田恒友氏裝幀
▼ポケット形新裝美本
▼定價各冊金五拾錢送料四錢

文藝の機運大に動くの時本叢書は破天荒の至廉なる定價を以て現文壇諸家の最も自信ある珠玉の名篇のみを提供せんが爲に生れたるものにして我が文藝の精粹を網羅す。即ち收むるところの小説及び戯曲は何れも現實の人生に徹して興味深く何人の胸にも強く強く響くと共に高朗の韻を永久の未來に傳ふ。あゝ誰か此叢書を讀まずして日本の新藝術を知れりと言ふを得んや。

1. 長篇小説 曠野の戀

愛慾の嚮みを中心としたる代表的傑作也

田山 花袋

2. 創作選集 離るゝ心

最近の力作者にして「勝敗」「復讐」の二篇を添ふ

徳田 秋聲

3. 長篇小説 人さまざま

發表の當時世評噴々たりし名篇にして附録に「妹の縁談」あり

正宗 白鳥

4. 戯曲選集 父歸る

この名篇の他に「茅の屋根」「温泉湯小景」等七篇を收む

菊 池 寛

5. 長篇小説 友と友の間

友と友との戀の三角關係を描したる代表的力作也

菊 池 寛

6. 長篇戯曲 牧場の兄弟

社會劇として上演されたる雄篇にして「地蔵教由來」を添ふ

久 米 正 雄

7. 創作選集 懶い春

代表的力作懶い春の他に「工廠裏にて」等數篇を收む

久 米 正 雄

8. 長篇小説 邪宗門

藝術の包ひ最も高き近來の珠玉の名篇なり

芥 川 龍 之 介

9. 創作選集 銀二郎の片腕

名人の精粹を凝らせるものにして「父親」「箱根行」等を收む

里 見 淳

10. 長篇小説 彼女と青年

若き男女の強い戀物語にして全巻を貫く才筆を見よ

里 見 淳

\\ \\ \\ \\

11	・長篇 戯曲	恐 怖 時 代	深刻を極めし稀有の名脚本 にして上演直に好評を博す	谷崎 潤一 郎
12	・長篇 小説	神 童	力作中一代に鳴る名篇にし て附録に「鶴唳」を添ふ	谷崎 潤一 郎
13	・長篇 小説	床 甚	代表的傑作にして人生の全 景を展開して深刻を極む	藤森 成吉
14	・創作 選集	鼠	好評の傑作にして「母」「雲 雀」の玉篇を収めたる佳品 也	藤森 成吉
15	・創作 選集	花 と 實 と 棘	従来の作品中より其精神を 抜きたる稀有の逸品也	佐藤 春夫
16	・長篇 戯曲	二 週 間	現代劇の代表作にして附録 に名曲「孔子の歸國」を添 ふ	長與 善郎
17	・創作 選集	恭 三 の 父	名作恭三の父の他に代表的 作品三篇を収む	加能 作次郎
18	・創作 選集	祖 母	發表の當時世人を驚かした 名篇にして他三篇を収む	加能 作次郎

19	・戯曲 選集	水 の お も て	代表的名篇のみを集めたる 他に類例なき脚本	久保田 万太郎
20	・長篇 小説	九 月 嶮	發表の當時噴々たる好評を 得たる名篇にして他一篇を 附す	久保田 万太郎
21	・長篇 小説	或 女 の 犯 罪	深刻と凄壯を極めたる傑作 にして「労働者誘拐」を収 む	江口 漁
22	・長篇 小説	屋 根 裏 の 戀 人	作風一轉機せる代表作にし て名作「あの頃の事」を附 す	宇野 浩二
23	・長篇 戯曲	津 村 教 授	上演されたる名脚本にして 他に「穴」の一幕物を添ふ	山本 有三
24	・長篇 小説	死 兒 を 抱 い て	若き女の情みを描きたる獨 特の優秀なる作品也	廣津 和郎
25	・長篇 小説	月 光 曲	ロマンチックなる名作にし て全巻を貫く真情流露の筆 致を見よ	田中 純

以下續刊

■ 隨筆感想叢書 ■

森 田 恒 友 裝 幀

■ 三筋町より 久保田万太郎著

定價壹圓八十錢
送料六錢

■ 藝術を生む心 藤森成吉著

定價壹圓八十錢
送料六錢

■ 文藝春秋 菊池寛著

定價壹圓七十錢
送料六錢

■ 藝術家の喜び 佐藤春夫著

定價壹圓六十錢
送料六錢

■ 點心 芥川龍之介著 近刊

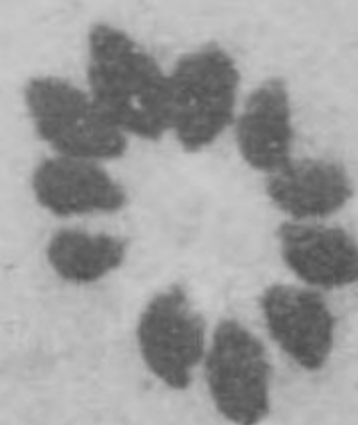
■ 人間雑話 久米正雄著 近刊

■ 文藝閑話休題 宇野浩二著 近刊

■ 藝談その折々 里見淳著 近刊

389
73

金星堂發行



終

